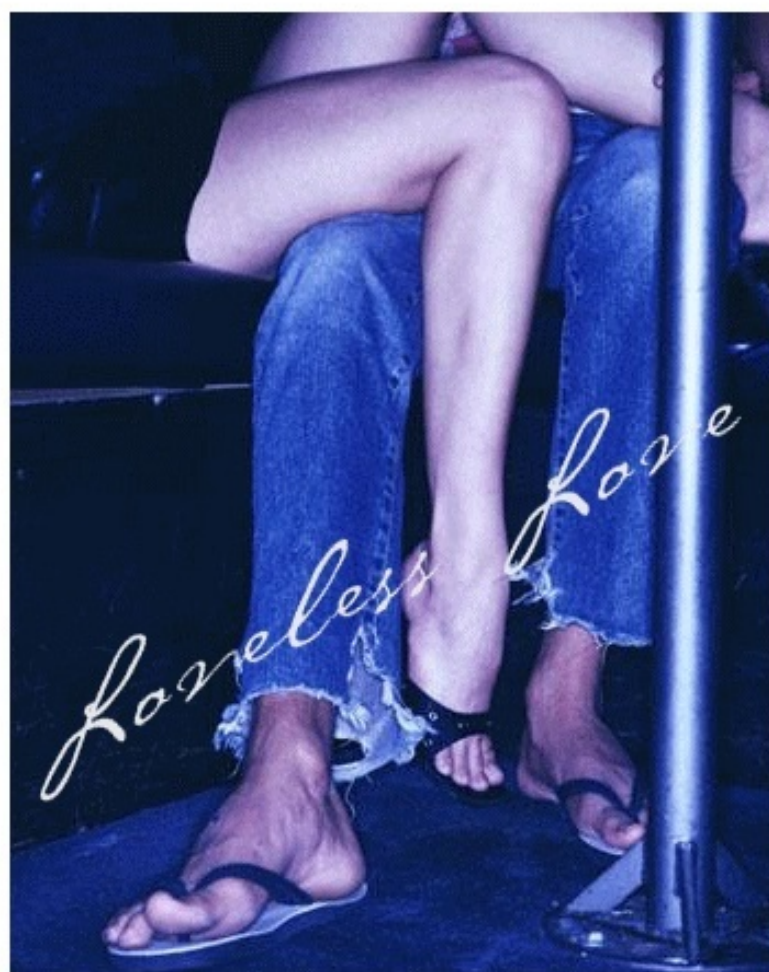


Loveless Love



神原 涼

Loveless Love - 落した指輪

やばい、どうしよう、遅刻なんて、大事な会議なのに...

私は地下道を走ってた。

パンプスじゃ走りにくいったら...!

でも、ぜったい遅れるわけにはいかない、今日は私の企画のプレゼンだから。
落ち度がないようにって明け方まで確認作業して、それで、ちょっとウトウト...
気がついたら、もうあんな時間で、心臓が止まりそうってあのことよね。
ああ、こんなこと考えてるヒマなんてないわ、急がないと!

「アッ」

溝にパンプスのヒールを突っかけて、ズターン!
一瞬何が起こったのか...

「痛っ...た〜い」

膝の痛みで我にかえた。

な、なによ、こんなところで、やだ、早く行かないと。
まわりに散乱した荷物をかき集めて立ち上がった。

「アッ!」

ない! 薬指の指輪! ど、どうしよう、落としたんだわ、ゆるかったから、
ど、どこかな、で、でも時間が、でも、あれは、あの人からもらった大切な指輪...
あっ! あった! 銀色にキラキラ輝いた指輪がコロコロと、あ、待って、
アッ! ウ、ウソ! 側溝の中に入っちゃった! やだ、なに、ウソーーッ!
ど、どうしよう、どうしようって取らないと...

あ、やだ、側溝のそばにホームレス... 気持ち悪い、でも、取らないと...
できるだけ顔を背けて、側溝の鉄の柵を、お、おもっ、お・も・た・いっ...

「ねーちゃん、なにしてんだあ?」

や、やだ、話しかけられちゃった、む、無視よ、無視。

そ、それにしてもっ、重たくっ、てっ、う・ご・か・な・いーーっ!

「なんか落っことしたのか?」

そうよっ! 大切な人にももらった大切な指輪をねっ! ハアハア... ダ、ダメだ...

「取ってやっか?」

「エ?」

思わず顔見ちゃった...！ うわっ、汚ったない...

ホームレスは立ち上がって側溝の鉄の柵をつかんだ。

あ、開くかしら、開いて、お願い！

「硬ってえなあ」

な、なによ、ダメなの？ 早くしてよ！

「ああ、ひっついちまってんだなあ」

ノンキな声出してないで早く開けてよっ！ 時間がないのよっ！

あっ！ そ、そうだ！

「ね、ねえ、私、すごく急いでるの」

「ハ？」

ウッ、汚い顔こっちに向けないで！

「そ、それでね」

なにげな〜く鼻を手で押さえながら... だって臭いんだもの。

「この中に指輪を落としたのよ、プラ、あ、いえ、銀色の、たいしたものじゃないの、
売ってもいくらにもならないんだけど、大切な人にもらったものだから」

「そっかあ、だから必死こいて探してたんかあ」

必死こいてって、こいてって、ま、まあ、そうだけど...

「それでね、お願いがあるの」

「エッ？ お、俺に？」

「ええ」

あたりまえじゃない、誰にしゃべってると思ってたのよっ!?

「探してくれない？ もし、見つけたら、それ相当のお礼はするわ、

その指輪の値段以上のお礼はするつもりよ、だから探して、お願い」

「あ、うん、わかった！」

ホームレスが真剣な顔してうなずいた。フーッ。

「これ、私の名刺」

私はカバンから名刺を一枚抜き取ってホームレスに差し出した。

「ここが会社なの、ここに、そうね、6時くらいまでは確実にいるわ」

ホームレスがポカンとして名刺を見てる。

「ここに届けてくれる？」

私は投げるようにホームレスに名刺を渡した。

「お願いね！ 頼んだわよ？ いい？ わかった？」

「う、うん」

ホームレスは真剣な顔して何度もうなずいた。

私は走りだしながら、

「必ず届けてよ？ いい？ 見つけてよ？」

「ま、まかすとけ」

ほ、ほんとにまかせらるのかしら、でも、あんたにまかせるしかないわっ！

「ねーちゃん、いってらっしゃーい！」

「ハ？」

振り向くと、ホームレスがニコニコしながら手を振ってたああああ。

そんなヒマがあったら、さっさと探してよっ！

私は、ゼーゼーしながら階段を駆け上った。

プレゼンは成功！

まだ結果は出てないけど、手ごたえはあった。

あの人も、廊下ですれ違うとき、耳元で言ったわ。

「これで決まりだね」

そう、これが成功すれば、私は企画を任せてもらえる。

26歳の、しかも女性で初の企画主任になれるのよ。

そうよ、ぜったい手に入れてやる。

私の力で、私だけの...！

あの人が言ったわ。

「君は自立した女性だね、素敵だよ」

私は男にベッタリ頼ったりなんかしない！

たとえ、愛する人にでも！

そうよ、母のようにはならない、父に養ってもらって、その父の愚痴ばかり言って、

だったら別ればいいのに、「あなたがいるから我慢してるのよ」ですって？

ふざけないでよ！ 自分が怖いだけでしょ？ 父と別れて一人で生活する力がないだけよ！

父も父だわ。女は男の言うこと聞いてればいいなんて、自信がないだけじゃない！

横暴に振舞って、専制君主ぶって、虚勢張ってるだけじゃない！

何度殴られたかわからない、私が思い通りにならないからって、バカみたい、

殴ったら言うことをきくとも思ってるの？ 軽蔑するだけよ。

「北川さん、内線3番に電話！」

「あ、は、はい」

バカみたい、父親のことなんか、もう8年も会ってないのに... 大学に入ってから...ずっと...

「もしもし、北川です」

「あ、こちら受け付けですが、あの... 北川さんにご面会の方が...」

「面会？」

誰？ ま、まさか、父？

「なんていう方？」

「それが... とにかく来てくださいますか？」

「え、ええ」

なによ？ 電話で言えない人？ 誰よ？ まったく、ちゃんと名前聞きなさいよ！

エレベーターで一階に下りて、受け付けに、え？ あっ！ アーーーーッ！

あ、あのホームレスがあああああっ！

「あ、ねーちゃん！」

ニコニコして手を振ってるううううっ！

「き、北川さん、あのお...」

受け付けの女の子が困った顔して私を見てるううううっ！

すーっさり忘れてたあっ！

「ねーちゃん、見つかったぞ！」

「エッ？」

「ほれ」

ホームレスがニコリして、汚ったない指でつかんだ指輪を突き出してみせた。

「あっ...」

た、たしかに、私の指輪！

「ちゃんと便所の洗面台で洗ってきたからよ」

べ、便所って... ま、まあ、いいわ、あとで消毒しよう。

「ど、どうも」

笑顔を作ろうとしたけど、引きつっちゃって。だって、受け付けの子がヘンな顔して見てるのよ？

「見つけたのはいんだけどよ、俺さあ、字い読めねえからよ、ここ見つけんのがタイヘンだよ、通る人に聞こうと思っても、俺がそばに行くと、みんな逃げちまうからよ」

そう言って笑ってるけど、あたりまえじゃない、私だって、できれば逃げたいわよ。

「え、えっと、お礼しなくちゃね」

私は急いでポケットからお財布を出した。

いくらにする？ 1万？ 5千円でもいいくらいだけど、いいわ、1万。

「はい、これ」

1万円札を差し出すとビックリした顔で私と1万円をキョトキョト見てる。

な、なによ、1万円見たことないの？ まあ、そうでしょうけど。

「お礼の気持ちだから、ね？」

これ受け取って、さっさと帰って！

「いらねえよ」

「ハ？」

「んな金、いらねえよ」

な、なによ、足りないってわけ？ ゆすり？ たかり？ やだ、なに、こいつ！

「そ、それじゃ、これで、どう？」

私はお財布からもう2万出して差し出した。

「いらねえよ」

ホームレスがビックリした顔で言った。な、なによ、まだ足りないっていうの!?

「そ、それじゃ、いくらなら...」

人の弱みにつけこんで、足元見るつもりかしら？ ロクでもないヤツね！

「いらねえよ、あんたが、大切なモンだっつうから」

「エ？」

ホームレスがチラッと私の顔見て、

「そんじゃ」

そう言っててをあげて背中向けた。 エ？ あ、

「ちょ、ちょっと待ってよ」

アッ！ ウゲッ！ お、思わずホームレスの袖つかんじゃったあつ。

ホームレスがビックリした顔で振り向いた。

「あ、あの、それじゃ私の気がすまないわ」

とにかく、“ちゃんとお礼はした”って形にしないと、あとで、ゆすられたりしたら...

「受け取ってちょうだい」

3万円をホームレスの顔の前に突きつけた。

さっさと受け取ってよ！

ホームレスがジッと私の顔を見て... な、なによ？

「だよな」

ボソッとつぶやいた。 エ？ なに？

ホームレスが汚い手で3万円をつかんだ。 ホーーーーッ...

ペコッと頭下げて、3万円をボロボロのジャンパーのポケットに突っ込んで出て行った。

ホーーーーーーーーッ...

あきらめたのね、これ以上値が吊り上げられないって、そうよ、3万なんて、充分すぎるわよ。

「あのお、すみませんでした」

受け付けの子が泣きそうな顔で私を見てた。

「渡すものがあるって言うから、お預かりしますって言ったんですけどお、

どうしても北川さんじゃなきゃダメだって、大切なものだからとか言って」

そりゃそうでしょうよ、私に会わなきゃ、お金もらえないものね。

「き、北川さん... 今の人... なんですか？」

「え... あの... なんでもないわ」

説明するのもめんどくさい。 指輪洗わなきゃ。あ、手もね。

「しばらく会わない方がいいな」

ベッドの上で、彼が煙草に火をつけながら言った。

「え？ どういうこと？」

「君の企画が通りそうなんだ」

「エッ、ほんと？」

「ああ」

「だけど、それと、会わない方がいいって、そんな、何の関係あるの？」

「実は、君の企画と吉田の企画が競ってるんだ」

「吉田くんの？」

私の1個下の後輩... たしかに彼も実力はある...

「俺は君を押してる」

私は嬉しくて、思わず彼の背中に抱きついた。

「もちろん、君の企画がいいからだよ」

彼は私の手をポンポンと叩いた。

「でも、俺と君がこういう関係だと気づかれたら、まわりはそうは思わない」

「え？」

「俺が個人的に君をひいきしてるだけだと思われてしまうだろ」

「そんな...だ、だいたい、私とあなたがつき合ってるなんて誰も知らないわよ」

そう、私たちのことは秘密。社内恋愛は暗黙の禁止。

彼は28歳で企画部課長。異例の大抜擢。女性社員みんなのあこがれの的。

だって、エリートコースの先頭を走っている人。

彼と結婚できたら重役婦人の座が約束されてるようなものだもの。

その彼と私がつき合っているなんて、誰も知らない。

秘密は二人を燃え上がらせる。でも、ときどき言ってしまいたくなる、

彼は私のものよって...

いいえ、できない、そんなみっともないこと...!

「君もわかってるだろ？ 俺たちの世界は足の引っ張り合いだって」

「え... ええ」

「どこで誰が見てるかわからないんだ、しばらく会うのはよそう」

「そう...ね、あの、でも、電話はいいでしょ？」

「ああ、でも、家に帰ってからだよ」

「わかってるわ」

わかってる、そうね、彼は私のことを大切に考えてくれてる、私の能力を認めてくれてる。それに、私は男にベッタリするような女じゃないわ。ビジネスはビジネスよ。彼はそこがいいって言うてくれてるんでもの。それに、この企画が通ったら、私は企画主任で、そして、いつか彼と...
私はすべてを手に入れる！ 欲しいものすべて、自分の力で！

おかしい... こない... 2週間も遅れてる...

会社のトイレの中、さっき、あれ？と思ったのに、ちがう...

まさか... 妊娠？

まさか！ 彼はいつもすごく気をつけてるし、

それに、きっとプレゼンのことで神経使ってたから少し遅れてるだけよ、そうよ、きっと。

今妊娠なんかできないわ。これからってときに、

冗談じゃないわ、子どもなんて。

トイレのドアが開く音がした。

「ねえ、アッタマくるよねえ」

あの声は企画部の子。

「だよねえ」

あの声もそう。二人とも企画部の事務職の女の子。

「北川さんさあ」

エ？

「そうだよお、これコピーして！なんて、私はあんたの部下じゃないっていうの！」

あんた、ニーツコリ笑って「ハイ！」って言ってたわよね。

「総合職だからっていい気になってるよね」

「なってるなってる、私はあんたたちとはちがうのよって、見え見え」

そうよ、違うのよ。

「デキる女気取っちゃってさあ」

デキるのよ。

「あれじゃ友だちできないよねえ」

あんたみたいな友だちはいらないわ。

「女に嫌われるってタイプ？」

けっこうよ。

「男にも嫌われるよ、あれじゃさ」

ご心配なく。あんたたちのあこがれの課長が恋人ですから。

私はボタンと個室のドアを開けて、彼女たちのいる洗面台に歩いていった。

「失礼」

二人の間をスッと抜けて、ゆっくりと手を洗う。

目の端に青ざめて引きつってる彼女たちの顔が見える。

「お先に」

私はドアを開けて振り返る。

「山田さん、さっきのコピー、枚数間違えてたわよ」

「え、あ、は、はい、す、すみません」

ボタンとドアを閉める。

雑魚はかまってもらえないのよ。

会社の帰りに買った妊娠検査薬、三本。全部陽性。うそ...

うそ、うそよ、妊娠なんて、うそ、こんな大事なときに、イヤよ、冗談じゃないわ！

明日病院に行こう。そうよ、きっと、そうよ、何かの間違いよ...

風邪を引いたから病院へ行ってから出社すると嘘の電話をして、

私は会社からも自分の住むマンションからも遠い産婦人科に行った。

お願い、妊娠なんかしてないって言って。

私は妊婦に混じって待合室の椅子に座りながら検査の結果を待っていた。

「北川さん、入ってください」

看護婦に呼ばれ、診察室に入る。

先生の前椅子に座って、おねがい、ちがうって言って。

「陽性ですね」

先生がカルテを見ながら言った。

「4週目だな」

「え...」

「予定日は、そうだなあ...」

「あ、あの、妊娠...してるんですか？」

「してますね」

「そ、そう...ですか」

「妊娠は初めてですね」

「は、はい」

「北川さんは...」

先生がカルテを見た。

「結婚はしてないんですね」

「え、ええ、でも、あの、婚約してるんです」

「ああ、そう」

「だから、あの、彼も、喜ぶと...」

「そうですか、おめでとうございます」

先生がそう言って微笑んだ。

バカみたい... 何が婚約してるよ... なんで嘘なんか...

墮ろしたいくせに、何が彼も喜ぶよ、バカみたい。

でも... 結婚してないんですねって言われて... 結婚もしてないのに妊娠なんかしてって...

それで困って墮ろすって... 不幸な女みたいに... 見られるのがイヤだったんだもの...

そうよ、そんなジメジメした立場になるなんて真っ平よ！

いつも日のあたるところにいたい、私は！ でも... どうしよう...

「なんだい、緊急って」

彼が胸ポケットから煙草を取り出した。

産婦人科の近くの喫茶店、ここなら誰にも見られない。

「あと30分くらいしかいられないんだ、専務と出かけるんだよ」

ちょっとイライラしたようにそう言って煙草に火をつけた。

私は彼に聞こえないように深呼吸して...

「妊娠してるの」

「え？」

「今... 病院に行って検査してもらったの」

「風邪じゃなかったの？」

「ずっと生理がこなくて... それで... 妊娠してるって」

「それで？」

「そ、それでって？」

「俺にどうしろって言うんだ？」

「ど、どうしろとか、そういうのじゃないけど...」

「今それどころじゃないだろ？」

「え？」

「君は大切なプロジェクトを抱えるかもしれないんだよ？」

「わ、わかってるわ」

「今、妊娠して、全部だめにしたいのか？」

「い、いいえ、ただ...」

「それじゃ結論はわかってるだろ」

「え、ええ、でも、墮ろすにしても、配偶者の署名と判が必要なのよ」

「書類をもらってきたの？」

「い、いいえ、本で調べたの」

彼は大きくため息をついた。

「いいかい？ まず、俺は君の配偶者じゃないんだよ」

「そ、そうだけど...」

「それに、もし、俺が署名して、それを誰かに見られたらどうする？

俺たちの関係が知られてしまうんだよ？」

「そんな、そんなの誰も見ないわよ」

「言ったろ？ 俺たちの世界は足の引っ張り合いだって、俺は、こういう失敗で

失脚していった先輩を何人も知ってるんだ」

失敗...

「署名は誰かちがう人にしてもらった方がいい。会社のことも俺のことも知らない人だ」

「え、ええ」

「冷たく聞こえるかもしれないけど、君のためなんだよ、君と俺たち二人のためだ」

俺たち... 私たち... そうね、二人のため... そうよ！

「わかったわ、ごめんなさい」

そう言うと、彼がニッコリ微笑んで席を立った。

でも... そんな人どこにいるの？

会社が終わって、電車に乗るために地下道に下りた。

会社のことも彼のことも知らない人なんて、私のまわりにはいないわよ？

大学時代のカレシ？ バカみたい、そんなこと頼めないわ。

頼みたくもない、そんなミジメなこと！ ぜったいにイヤ！

それにしても、この地下道、ほんとにホームレスが多いわね。

なんかすえた匂いがして、すごくイヤ！

あいつもいるのかしら、私の指輪を拾ったホームレスの男。

やだあ、顔合わせたくない、でも、こここのところ見てないわよね？

っていうより、忘れてたわ。 あっ！ あいつは？ そうよ！ あいつよ！

私はキョロキョロとまわりを見回した。

ホームレスって、どれもみんな同じに見えてわかんないな。

そうよ、あいつに署名・捺印させればいいんだわ。

お金出せばそれくらいホイホイやるわよ。借金の保証人じゃないんだもん。

どこだろ？ いないなあ。 もう、肝心なときにいないんだから！

でも、とにかく、まずは書類をもらってきてからだわ。

明日は土曜だから、午前中に病院に行って、それからね！

また違う病院に行って、今度は余計なことは言わずに書類をもらってきた。

あああ、産婦人科なんて二度と行きたくない！ あともう一回行かないといけないけど...

会社の近くの地下道。今日は休みだから誰もいないはず。

今日はパンプスは履いてない。カジュアルな格好でここに来るなんて初めてだわ。

会社へはいつもビシッとスーツとパンプス。

でも、今日はあのホームレスの男を捜すだけだから、そんな格好してられないわ。

ああもう、見つからない。ホームレスって同じところにはいないわけ？

いないか... 家がないんだものね... でも、それじゃ困るのよおおっ！

あ〜あ、1時間かけて捜したけど、いない。

駅前の喫茶店でコーヒー飲んで帰ろうかな。

地下道を上がると、ピーカンの天気。こんな天気のいい土曜の真昼間に、私って何やってんの？ 暗い地下道でホームレス捜し？ バカみたい。ハア～... ため息ついて喫茶店の方に、え... あれ？ あの、ベンチのところ、ホームレスが、もしかして、まさか、あれって、あれだあっ！ 駅前の小さなスペースに木が植えられてて、ベンチが置いてあるけど、あんなところで休む人なんかいない、私もいつもは通り過ぎるだけ。でも、ボーッと口開けて空見てる、あれは、ぜったい、あいつよ！ 私はベンチに向かって全速力で走った。

「ちょっと！ あんた！」

あいつはぜんぜん気づかずにボーッと空見てる。

「ちょっと！ そのホームレス！」

今度はビクツとしてこっち見た。やっぱりあいつだ！

「ちょっと、あんた、頼みがあるのよ！」

私はゼーゼーしながらあいつのそばに行った。

「え？ あっ！ ねーちゃん！」

あいつが汚ったない顔でニッコリ笑った。

「あのね、あんた、名前なんていうの？」

「え？ お、俺？」

「そう、あんた」

「カズオ」

あいつがそう言って微笑んだ。

「ちがうちがうちがう！」

「え？ 俺、ほんとにカズオだよ？」

「そうじゃないわよ！ 上よ！ 上の名前！ 名字よ！」

「あ？ モリシタ」

「森下ね？ 木が三本の森に上と下の下ね？」

「うん、んで、ねーちゃんは？」

「ハ？」

「ねーちゃんの名前」

ノンキに名乗り合ってる場合じゃないのよっ！

「そんなこといいから、あんた、ちょっとここ動かないでてよ？」

「え？」

「いいからここにいて！ わかった？」

「う、うん」

あいつがポッカーンと口開けて私を見てるけど、かまってられないわ！

「いい？ ぜったいそこにいてよ？」

「う、うん」

たしか向こうのとおりに事務用品の店があったわ。

私は急いで横断歩道を渡ろうと、

「危ねえっ！」

え？ っと思う間に、グイッと抱きかかえられて、

キキーーーーッ！

気がつくやうな道路に... ううん... あいつに抱きかかえられて...

「ねーちゃん、危ねえよお、信号赤だぞ？」

ノンキな声で心配そうな顔であいつが...

「ど、どうも」

私はホームレスなんかには助けられたのが、かっこ悪くて、

「ちょ、ちょっと、離して」

あいつの手を振り払って立ち上がった。

「とにかく、そこで待ってて」

そう言ってもさっきのベンチを指差して、青になった信号を見て渡った。

やだ、ホームレスに抱きかかえられて、この服、捨てよう。

「森下」っていう三文判とボールペンを買って、さっきのベンチに戻った。

あいつは相変わらずポカーンと空を見てた。やれやれ、お気楽ね。

「あ、ねーちゃん、おかえり」

あいつが私を見てニッコリ笑った。

お、おかえりって家に帰ってきたわけじゃないんだから...って、こいつにとっては家なのかしら？ そうね、どこでも家なのね、ていうか、家がないのよね。

「あのね」

私はまわりをチラチラ見て、人通りは少ないけど、こんな目立つところじゃまずいわよね。

「ちょっと、こっち来て」

私は駅の裏側にホームレスを連れていった。

「あのね、お願いがあるの」

「うん、わかった」

「まだ何も言ってないわよ」

「いいよ、なんでもするよ、俺」

そう言ってニッコリ笑った。なんでも...ね。してもらおうわよ。

「あのね、ここに名前を書いてほしいの」

私はカバンの中から書類を出して見せた。

あいつはポケーツとした顔で書類を見てる。

「わかるでしょ？ わけありなのよ、署名がいるの」

「これ、なに？」

「読めばわかるでしょ!？」

「俺、字い読めねえんだ」

あいつが情けなさそうな顔で笑った。

「エッ? ぜ、ぜんぜん？」

「ひらがななら...」

「な、名前は? 自分の名前書ける？」

「ハハハ、自分の名前は書けるよお」

ハハハじゃないわよ、まったく、まあ、それさえ書ければいいわ。

「ここに署名してほしいのよ、あ、借金の保証人じゃないわよ、安心して」

「ハハハ、なってもいいけどよ、返せねえもんなあ」

ノンキに笑ってるけど、あんたにだけは借金の保証人は頼まないわよ。

「そんで、これ、なに？」

「墮胎の申請書よ」

「なんだそれ？」

「妊娠してるのよ」

私はチラッとだけあいつの顔見て...

「でも、生むつもりないから墮ろすの、それに必要な書類」

私はできるだけ軽く聞こえるように言った。そうよ、こんなこと、なんでもないことよ。

「んで、なんで、俺が？」

まったく、当然、とつてもまともな疑問だわ。まともだから困るのよね...

こういうときは... そうね...

「不倫したの、相手には奥さんも子どももいるのよ」

「エッ？」

そんな驚かなくても、今の世の中じゃ、ありふれた話じゃない、ウソだけど。

「だから、墮ろさないと、相手の家族にも悪いし」

少しお涙ちょうだいにした方が説得力あるわよね。

「それに、一人で育てる自信もないの、子どもができたなら働けないし」

あいつはジーッと私の顔を見てた。

な、なによ、嘘だってバレたのかしら？

「ねーちゃんは？」

「ハ？」

「ねーちゃんは、ほんとは生みたいのか？」

「エッ? あ... う、ううん、生みたくない、だって、無理よ」

本当に...無理...

「だから、お願い、名前だけ貸してくればいいの、ぜったいに迷惑かけないわ、

ちゃんとお礼もするから、だから、お願い」

「礼なんていいけどさ...」

「よくないわよ、お世話になるんだから、お願い、署名して」

「わかった、書くよ」

ヤッタ...！ 心の中でガッツポーズしちゃった。

「それじゃ、ここに名前書いて」

私は配偶者の署名欄を指差して、ボールペンを渡した。

あいつが汚ったない指にボールペン持って、わ... な、なんか小学生みたいな字...

森...下...一...男...

ホームレスでもいちおう名前はあるのね。まあ、あたりまえだけど。

「ここに判を押してちょうだい」

私は名前の下を指差して、三文判を渡した。

「へえ、これ、俺のハンコ？」

あいつが嬉しそうな顔してハンコを見てる。

「終わったらあげるから、早く押して！」

「え？ くれんの？」

「ええ」

そんなもの私が持っててもしょうがないわよ。

「俺、自分のハンコ持つのはじめてだよ」

ニッコリ笑って、そりゃそうね、必要ないもの。

「いいから、早く！」

あいつがギュッと押しつけて、森下の文字がベツトリ。

「すげえ、ちゃんと俺の名前だあ」

これでよし...と。ホッ。

「それじゃ、これは、お礼よ」

私は財布から5万抜き取って、あいつの前に差し出した。

「え？」

あいつは驚いた顔して私とお札をチロチロ見た。

足りないなんて言わせないわ。名前借りるだけで5万なら十分でしょ？

「ねーちゃんさあ、ケタちがうよお」

あいつがそう言ってニヤニヤ笑った。

な、なによ、脅し？ ほ、ほら、やっぱりこういうヤツらって、口クでもないんだから！

「俺みてえのにはさあ、50円とか100円でいんだよ」

「ハ？」

「こんな大金ばっか出してたら、ねーちゃんの方がホームレスになっちゃうぞ？」

あいつがそう言って笑った。

な、なによ、こいつ、わけわかんない、お金もらえるんだから素直に取ればいいじゃない。

「それに、もうもらったじゃん、ほれ」

あいつがそう言って三文判をかざしてみせた。

「自分のハンコなんてなあ、初めて持つよお」

あいつはそう言いながら嬉しそうに三文判を見てる。

な、なによ、5万より三文判の方がいいってわけ？ そんなわけないじゃない！

なに考えてるの、こいつ!? それとも頭イカレてるのかしら？

そうよね、字も読めないんだから、ちょっと足りないのかも。

これ以上かかわらない方がいいわ。

「そ、それじゃ、どうも」

私はそそくさと書類をカバンにしまって、あいつに背を向けた。

「ねえちゃん」

な、なによ、やっぱりお金が惜しくなったわけ？

「なんですか？」

私はツンとして、振り向いた。

「それって...」

あいつが私のカバンを指差した。

「いつ行くんだ？」

「あ、あなたに関係ないです」

「でも、俺の名前書いてっからさあ、ぜんぜん関係なくはねえだろ？」

こ、こいつ、ときどきまともなこと言うのよね。

そ、そりゃそうだけど、そんなこと聞いてどうするのよ!?

「ねーちゃん、カレシと行くのか？」

「エ？」

彼と...なんて、行けるわけないじゃない、誰かに見られたら... それに...

「俺、ついてってやろうか？」

「ハ？」

「なんか、そういうの、一人で行くのってヤなんじゃねえかなあって」

ズキッと... なんか、なに、こいつ、なによ！

「俺、ヒマだしさあ、ついてってやるよ？」

「け、けっこうです！」

私はクルッと背を向けてスタスタと駅に走った。

バカじゃない!? ホームレスなんか連れて病院行けるわけないじゃない！

行きたくもないわよ！ なにが一人で行くのイヤなんじゃないかよ!?

余計なお世話よ！ こんなことなんでもないわよ！

私の人生に邪魔なものを取り除くだけの話じゃない！

そうよ！ 邪魔なものは取り除いて、欲しいものは必ず手に入れてやるわ！

でも、ほんとにいつ行こう？ 月曜はダメ、企画が採用されるかどうか決まる日だから。

きっと私になる。彼もそう言ってたし、彼が押してくれてるから。

火曜日？ そうね、そうしよう。

最低な日

今日は、いよいよ採用された企画が発表される日。
つまり、私が企画主任に任命される日。

今日はいつにもましてビシッと決めてきたわ。メイクも派手すぎず、でも知的に。
スーツも紺のプラダのパンツーツーツで決めた。重役たちの前に出るんですもの。
なんか、ドキドキする、だ、大丈夫よ、彼がついてるんですもの、大丈夫。

「北川くん」

彼が私の名前を呼んだ...!

「はい」

できるだけ冷静な声で返事をした。いよいよだ...!

「吉田くんも、一緒に来たまえ」

え? 吉田くんも? まあ、彼も企画を出したんですものね。結果を聞く権利はあるわ。

“課長”の後ろを私と吉田くんが並んで重役室に向かう。

背筋を伸ばして、そうよ、堂々と見えるように歩かなきゃ。

そして、“課長”が重役室のドアを開けた。

給湯室の前の喫煙コーナー。

私は普段会社で煙草は吸わない。でも... 今は吸わずにいられない...

なに...いったい...どうということ...

プレゼンは成功したし、企画も、そうよ、私の企画が通ったのよ。

なのに、どうして吉田が企画主任で、私が「暫定的主任補佐」なの?

あれは私の企画よ?

『対外的交渉の場も多くなるから、やはり主任は男の吉田くんの方がいいだろう』

重役の言葉。その横で黙っていた彼。どうして何も言ってくれなかったの?

だって、あれは私の企画よ? おかしいじゃない! 私の企画の主任が吉田なんて!

『北川くんは暫定的主任補佐ということで吉田くんをフォローして...』

つまり、吉田はこれからも主任なのに、私はこの企画のみの“主任補佐”の座。

この企画が終わったら、また、ただのOL...

どうして? どうしてみんなおかしいと思わないの?

どうして彼は何も言ってくれなかったの？ 押してるって、私を押してるって言ってたのに...

「北川くん」

振り向くと彼が立っていた。

できることなら...今...彼の胸の中に飛び込んで...泣きたい...

「残念だったが、君の企画自体は採用されたんだから、頑張れよ」

「どうして...」

「え？」

「どうしてですか？ 私の企画なのに、なぜ吉田くんが主任で、私が...」

「それは専務が説明しただろう？ そういうことだよ」

「でも、あなただって、課長だって言ってたじゃないですか！ 私を押してるって！」

「君の企画をね」

「え？」

「北川くん、ビジネスはビジネスだ、より効率のいいやり方を選ぶ、そういうことだ」

「そ...そんな...」

「とにかく明日から気持ちを切り替えて企画の成功のために頑張るんだ」

「今夜...来て」

「え？」

「お願い...」

彼はチラッとまわりを見て、小さい声で言った。

「そんなこと、会社で言うことじゃないだろ」

「だって...一人でいたくないの...」

「今夜は専務も交えて飲み会だろ？ 君も出席するんだぞ？ 憶えてるだろ」

「行きたくない...」

「君らしくないな」

彼はそう言ってフツと鼻で笑った。

「とにかく気持ちを切り替えて、自分の仕事をしっかりこなしてくれ」

そう言って私の肩をポンと叩くと喫煙コーナーから出ていった。

気持ちを切り替えて... そんなことできない... でも、やらないと...

重たい気持ちで、もう一本... 煙草に火をつけた。

深夜の地下道の中、フラフラになって、壁をつたいながら歩いた。

最低の気分... 吐き気がする...

私の企画の主任に吉田になったお祝い... ううん、そんなこと、もうどうでもいい...

最低なのは... 専務のあのひとこと...

「藤木くんと私の娘が婚約することになってねえ」

藤木... 彼... 私の彼... 一瞬なんのことかわからなかった。

だって、彼はそんなことひとことも言ってなかったし、私の恋人なんだから...

「この前、見合いをさせたんだよ、私の希望でね、藤木くんを頼んだんだ」

それは... 私と彼が合わなかった数週間の間のこと...

「娘は、見合いなんかイヤだってゴネてねえ、ところが、藤木くんに会ったら、

コロッと態度が変わってしまって、まったく女の子っていうのは現金なものだなあ」

そう言って大声で笑う専務の横で、彼が控えめに微笑んで...

『なによ？ どういうこと？ 私とつき合ってるのに、なんで専務の娘と見合いなんかするのよ!? 私はどうなるの？ あなたの子どもだって妊娠してるのよ?』

できればみんなの前でそう叫びたかった。

でも、そんなみっともないことできない... ただ黙ってお酒を飲み続けたけど、

ちっとも酔えなくて...

だから... しばらく会わない方がいいって言ったのね... 専務の娘と見合いするから...

私のためだなんて... 自分のためだったんじゃない...

私を押しなんて、私なんてどうでよかったのよ、専務の気に入ることならなんでも...

これが、あなたの言う『より効率のいいやり方』なわけ？

そうよね、専務の娘と結婚すれば、これで怖いものなしよ。あの専務は次期社長ですもの。

彼が社長になることだって夢じゃなくなるってわけよ。

最低！ 最低よ！

どうりで妊娠したって言ったら冷たいわけだわ。そうよね、今そんなかなことが専務に

知れたら... バラしてやろうか？ 専務に、「課長の子を妊娠してます」って言うの。

それとも、彼に言うのよ、「あなたの子どもを産むわ」って。どんな顔するかしら？

クククッ... いつも冷静なあの顔がどう変わるか見ものだわ！

バカみたい、そんなこと... そんなみっともないこと... できない...

気持ち悪い... 吐き気がする... これはツワリ？ 飲みすぎ？ どっち？

どっちでもいいわ、もう、どっちでも、ただ、気持ち悪いのよ... 助けて...

「たす...け...て...」

私はそのまま壁の前にしゃがみ込んで、ゲーゲー吐いた。

最低...こんなところで...酔っ払って吐いてる女なんて...いつも軽蔑して横目で見て

通り過ぎてた...なのに今...私が...最低...男に捨てられてヤケ酒飲んで吐いてる女...

こんなところで...ミジメで...涙が...ちがう...吐いてるから涙が出てるだけよ...

最終電車に乗るために通り過ぎる人たちの足音を背中に聞いて...誰もそばに寄ってきて

くれない...あたりまえね、こんなゲロ吐いてる酔っ払いのそばになんか...

「ねーちゃん？」

え？

「大丈夫かぁ？」

顔を上げると、あのホームレスが私の横にしゃがんでた。

「全部吐いちまえよ、楽になっからよ」

そう言いながら私の背中をさする。やめてよ、プラダの服が汚れる、だけど、背中をさすられると、楽に吐けそうで、私は、もっとゲーゲー吐いた。

最低、ホームレスなんかに背中さすられて、ホームレスに同情なんかされて、最低、なによ、これ、なによ、こんな、冗談じゃないわよ！

私が何したっていうのよ！

「水持ってきてやっか？」

ホームレスの汚ったない顔が心配そうに私の顔を覗き込む。

なによ、これ、なによ！ もう、もうどうなってもいいわ！

「ちょっと、あんた！ 来て！」

私はそう言って立ち上がった。

「え？」

ホームレスがポカンと私を見上げてる。

「早く立ちなさいよ！」

「え、あ、う、うん」

ホームレスが戸惑った顔して立ち上がった。

「行くわよ！」

「え？ど、どこへ？」

「いいから早く！」

「あ、う、うん」

私はカツカツとヒールの音鳴り響かせて地下道を歩いた。

もういいわよ！ もうどうなったっていいわよ！ もう好きにするわよ！

「早く来なさいよ！」

私の後ろでボケーツとしながらノロノロついて来るホームレスに怒鳴った。

「あ、う、うん」

私は切符売り場で切符を一枚買って、ホームレスに渡した。

「え？あ、あの、俺、どこに行くんだ？」

「黙ってついてくればいいのよ！」

「う、うん」

私は定期を自動改札に入れてさっさと階段を...

「ね、ねーちゃん！」

振り向くと、ホームレスが改札のバーの向こう側で困った顔して立っていた。

「なにやってるのよ！ 早く来なさいよ！」

「こ、これ、動かねえんだよ」

ホームレスはますます困った顔して、改札のバーを押してみせた。

「バカじゃないの!? 切符入れなさいよ！」

「ど、どこに？」

「まったく！ 切符の使い方もわからないの!？」

「電車乗ったことねえんだよ」

ホームレスが情けな〜い顔で笑った。

「そこに入れるのよっ！」

自動改札の切符挿入口を指差した。

「あ？ ああ、そっかあ」

ホームレスが汚ったない手で切符を挿入口に入れた。

しきりが開いてホームレスがこっち側に出た。

「すげえなあ」

そう言って笑ってるけど、バッカじゃない!？」

「ほら、早く！ 電車が来ちゃうわよ！」

「う、うん」

私はカツカツと階段駆け下りた。

ナニヤッテルノ私...

どうでもいいわよ！ もうどうなってもいいわよ！

あと3分で最終の電車が来る。

「おい、こんなところに入ってきちゃダメだよ！」

後ろの怒鳴り声に振り向くと、あいつが駅員に腕をつかまれてた。

「ほら、早く出て！」

駅員があいつの腕を引っ張って階段の方に連れていこうとした。

「ちょっと！ その人、私の連れですけど！」

「ハ？」

駅員があいつの腕つかんだまま驚いた顔で私を見た。

「ちゃんと切符も買いましたっ！ ほら！ 早く見せなさいよ！」

あいつはおどおどしながら駅員に切符を差し出した。

駅員は戸惑った顔して私とあいつを交互に見た。

「何してるのよ！ 早くこっちに来なさいよ！」

私はあいつのボロボロのジャンパーの袖を引っ張った。

駅員は戸惑った顔のまま、手を離してその場を去っていった。

そうか... ホームレスがあちこち入り込まないように警戒してるのね。

電車が到着して乗り込むと、車内のみんながギョツとした顔でこっちを見た。

なによ、なんだっていうの？ そうよ、私、ホームレス連れてるわよ！ 悪いっ!?

世の中全部敵みたいな気持ちで、私はドカッと開いてた席に座った。

「早くあんたも座りなさいよ！」

ドアのそばに突っ立ってるあいつに言うと、

「う、うん」

おとなしく私の隣りに座った。

やだ、なに？ まわりの乗客たちがチラッチラッとこっちを見てる。

こいつと並んで座ってるから？ そうよね、いつもなら、私だってイヤよ、ほんとは今だって...

私は横目でチラッとあいつを見て... ボロボロの汚いジャンパーのポケットに手を突っ込んで
ポーッと窓の外を見てる... どう見てもホームレス... あたりまえよ、ホームレスなんだから。

髪はボッサボサで顔が見えない、ううん、鼻から下は見える、垢と埃でドロドロに汚れた顔、

ボロボロで汚い服... あちこち擦り切れて穴が開いて、汚れた長靴もあちこち切れてて、

つま先から汚い指が見えてる...。見てるだけでゾッとする。

隣りに座っていると気が狂いそうなほど臭いし！

なのに...

なんで連れてきちゃったんだろう... なによ、今さら、でも、なにやってるんだろう、私...

だって、あのまま一人でいたら頭がおかしくなりそうで... だからって、なんでホームレスを...
わかんないわよ、わけわかんないわよ、もう何もかもわかんなくなっちゃったわよ！

電車を下りて駅前に出た。

もう最終バスは行っちゃったからタクシー拾わなきゃ。

「あの、ねーちゃん？」

後ろをとぼとぼついてきたあいつが話しかけてきた。

「なによ？」

「俺... どこに行くんだ？」

「私の家よ！」

「エッ？」

「文句あるっ!？」

「ね、ねえ...けど、あの、なんで、俺、ねーちゃん家に行くんだあ？」

「知らないわよっ！」

「へ？」

「いいからついてくればいいのか！」

「う、うん」

手を上げるとタクシーが止まった。

「桜ヶ丘2丁目まで」

そう言いながら乗り込むと、

「あ、ちょっと、あんた、入ってきちゃダメだよ！」

運転手があいつに言った。

「この人、私の連れです」

「エ〜!? お客さ〜ん、困るんだよねえ、そういう人乗せるのはさあ」

まったく、うるさいわねっ！ 私は財布から一万円札を出して運転手に突き出した。

「お釣りはいらなから、さっさと出してください！」

「しょうがねえなあ」

運転手は渋い顔しながらも、しっかり一万円は受け取って車を発車させた。

ほらね？ お金なのよ！ なんでもお金！

夜の住宅街をタクシーが走る。車内の中にあいつの臭いが充満して、ウツ... 吐きそう...

思わず窓開けて顔を出した。ウツ...

「ゲッ...」

「大丈夫かあ？」

あいつが心配そうな声で声をかけた。あんたの臭いで吐きそうなのよっ！

「お客さ〜ん、車の中で吐かないでよねえ」

「わかってますっ！」

タクシーから降りたときは、もうへ口へ口で、フウウウ...

「俺、タクシーなんて乗んの、生まれてはじめてだよお」

ノンキな顔して笑ってんじゃないわよっ！ あんたのせいで気持ち悪くなるわ、
運転手にイヤミ言われるわで散々だわよ！ まったくなんで連れてきちゃったんだらう？

ああもうっ、考えたってしょうがないわ！ 連れてきちゃったんだからっ！

マンションのドア開けて、エレベーターのボタンを押した。

連れて...来ちゃった...

カギを開けて、ドアを開けて、パチンと電気をつけた。

「すげえ！ きれいだなあ！」

私の後ろで、あいつが感心したように言った。

そうよ、いつ彼が来てもいいようにきれいにしてたのよ。

そして、ここに、こいつを入れるわけ？ イ、イヤー————ッ！

い、今さらそんな、でも、イヤ、でも、あっ、そうだ！

「ちょっと、あんた！ 服脱いで！」

「ハ？」

「ここで、部屋に入る前に着てる服全部脱いで！」

私はキッチンに走って行って、大きなゴミ袋を持ってきた。

「脱いだら全部この中に入れて！」

あいつはキョトンとした顔で私を見てる。

「そんな汚ったない服で部屋の中に入ってこられたらイヤなの！」

「あ？」

「わかんない？ 部屋が汚れるでしょ!？」

「あ、ああ、うん」

「あっ、脱いだらお風呂に入って！」

「へ？」

「お風呂よ！ わかんないの？ お・ふ・ろっ！」

「ふ、風呂入んの？」

「そうよ！ だって、あんた、死ぬほど臭いんだもの！ 部屋に臭いがついちゃうわよ！」

「ねーちゃん、俺を風呂に入れに連れてきてくれたのか？」

「ちがうわよ！ いいから入って！ ここだから！」

私は玄関の横のバスルームのドアをバンッと叩いた。

「いい？ 最低3回はセッケンかけて洗ってよね！」

「う、うん」

「シャンプーも3回よ！ わかった？」

「う、うん」

「あっ！ その汚ったないヒゲも剃ってよね！ 髭剃りは…」

彼が使ってた髭剃り… もう… 使うことなんかない…

「お風呂の中にあるから」

私はそう言うと、キッチンとの境のドアをバタンと閉めた。

ベッドルームで、プラダのスーツを脱いだ。

バカみたい、こんなの買っちゃって、クシャクシャにしてベッドの足元に放り投げた。

バカみたい、私、主任になれるなんて思って、彼が私を押してくれるなんて信じて…

彼が… 専務の娘と… 何も言ってくれなかった… ひとつもそんなこと…

私は遊ばれたの？ 遊ばれて、妊娠して、捨てられた…？

イヤよ！ そんなミジメな女になるなんて！ 冗談じゃないわ！

そのへんのバカな女と一緒にされたくないわ！

「ねーちゃん？」

振り向くとあいつがドアの隙間から覗いてたあっ！

「キャーーーー！」

バタンとドア閉めて、ゼーゼー、な、なによ、やだ、下着だけだったのに…

「あ、あのよお、俺、どうすればいいのかなあ？」

「ど、どうすればって、どういうことよっ!？」

「ハダカのままでもいいんか？」

「あっ！」

忘れてた…！ そ、そうよね、何か着せないと、でも、男モノなんて、あっ… ある。

彼のために買っておいたパジャマ… 一度も着てないパジャマ…

「い、今持っていくから、バスルームに入ってて！」

「う、うん」

ジーパンとシャツを着て… 彼の前では絶対にジーパンなんか履かなかった。

なにげない風に見えるブランドもののカジュアルな服を着て…

デキる女に見られたかった、彼の好きな自立した魅力的な女に… バカみたい！

クローゼットを開けて、真新しいパジャマとトランクスを出した。

そうよ、これ、高かったのよ、でも、彼は一度も着てない、だって…

泊まっていたことがない…

彼がここに来るのは金曜の夜か、土曜の夜。だけど、どんなに遅くなっても必ず帰っていったわ

。

「明日は専務とゴルフなんだ」

「月曜まで片づけておこなきゃいけない仕事があるんだ」

私は物分りのいい顔で送り出してた、いつも…。

でも、本当は、もっとそばにいてほしかった。「たまには泊まって行ってよ」って言いたかった

。

だけど、パジャマなんか買って、男を引き止めるようなみっともない女に見られたくなかった。

バカみたい、そんなことしてもしなくても、もう終わってしまったんだわ。

ほんとに…？ほんとに終わりなの？ わからない… とにかく一度彼と話たい！

「ちょっと！ここに置いておくからね！」

バスルームの前で、あいつに声をかけた。

「う、うん」

玄関のタタキに、ゴミ袋に入ったあいつの服…！ウツ… き、気持ち悪い。

さっさと外に出さなきゃ！ノミがいるかもしれないわ！ウゲッ、この長靴も入れなきゃ。

で、でも、触りたくない…。

そうだ！私はトイレからトイレ掃除用のゴム手袋を持ってきて、

ゴム手袋はめて、袋の中に、ウツ、顔背けても臭いっ！ポイツ！とゴム長入れて、

ギュッと袋の口を縛って、玄関の外の廊下に出した。

ゼーゼー…

「あれ？俺の服は？」

背中からあいつの声がした。

「廊下に出したわよ！臭いんだもの！」

振り返っ… え？ダ、ダレ、コイツ???

紺色のパジャマ着て、まだ少し濡れてる髪から顔が、なんか、こいつ、なんか、若くない？

「あ、あんた、あんた、歳いくつ？」

「俺？えっと… 20歳」

「ハ、ハタチ—————っ!？」

オッサンかと思ってた————っ！だって、ヒゲ面で、だって、ホームレスって、

だいたいオッサンで、だって、顔なんかドロドロで見えないし、だって、20歳の子が

ホームレスしてるなんて、聞いたことないんだもの————っ！

「風呂入るんの何ヶ月ぶりだあ？ すごえサッパリしたあ」

そう言って笑う顔が、たしかに若い————っ！

「あんた、あんた、あの、あんた」

「ン？」

「コ、コーヒー… 飲む？」

「う、うん」

と、とにかく、コーヒー飲んで酔いを覚まさなきゃ...

キッチンのテーブル挟んで、私と...あいつ。

な、なんか落ち着かなくて、煙草に火をつけた。

ヘンなカンジ... さっきまでのホームレスなのよね、こいつ？

でも、どー見ても、ただの20歳の男の子なんだけど？ しかも、今さっき現れたばかりの。

「あ、あのお」

あいつが困ったような顔して言った。

「俺、まだどっか汚れてっかな？」

「え？ べつに... 大丈夫よ」

「そ、そっか、あのお」

「なによ？」

「なんで、そんなジッと見てんのかなあって」

「エッ... べ、べつにジッと見てなんかいいわよ」

「そ、そっか... あのお」

「な・に・よっ？」

「俺... なんでここにいんの？」

ギクッ...

「わ、悪いっ!？」

「いや、なんか、風呂まで入れてもらっちゃまって、ありがとなあ」

「べ、べつに、親切でやったわけじゃないわよ！ あんたが死ぬほど臭いからよ！」

「ハハハ」

「笑い事じゃないわよっ！ だいたい、あんた、なんで20歳のくせにホームレスなのよっ？」

「ハハハ」

「ハハハじゃなくて！ なんでその若さで働かないでホームレスなんかしてるのよっ？」

「家賃払えなくなってよ」

「ハ？」

「仕事クビになって、家賃何ヶ月も払えなくて、そんで追ん出されちゃまってよ、ハハハ」

「また探せばいいでしょ!？」

「雇ってくんねえんだよなあ」

あいつは情けな〜い顔して笑った。

「俺、ロクに読み書きできねえし、保証人もいねえしよ、それに俺、ケガしてっからよ」

「え？」

「作事中に事故って、こっちの脚曲がねえんだ、だから、なっかなか雇ってもらえなくてよ」

そ、そう言えば、なんかノロノロ歩くと思ってたけど...

「不景気だしなあ、日雇いの仕事もなかなかなくてよ」

そう言って、ノンキに笑ってるけど、20歳で人生終わっちゃったのよ、あんた!?

「ねーちゃん、名前なんてえの？」

「北川よ」

「ちげーよ、下だよ下」

あいつがそう言って笑った。

「み、美里よ」

「ミサト？ みーちゃんか」

「みーちゃんなんてネコみたいな呼び方しないで！」

「そんじゃ、みさとちゃん？」

「ちゃんはやめて！」

「んじゃ、みさと？」

「呼び捨てにしないで！」

「んじゃ、なんて呼べばいい？」

「呼ばなくていいわよっ！」

ホームレスに名前呼ばれたくなんかないわ！

「ねーちゃん、あれ、もう行ったのか？」

「あれ？」

「俺が名前書いたやつ」

「あ... ま、まだよ、明日、そうよ、明日行くのよ」

そうよ、明日、こんな邪魔なものは、さっさと処理してやるわ！

私は煙草をギュッと灰皿に押しつけた。

「あ～あ、もったいねえなあ、まだ吸えんじゃん」

あいつが灰皿から吸殻拾って火をつけた。

「ちょっと！ シケモク拾わないでよ！」

「まだこんな長げえよ？」

「やめてよ！ 私の部屋でシケモク拾いなんて！ ほら！」

私は煙草の箱をグイッとあいつの前に押しやってやった。

「もらっていいの？」

「いいけど」

ツンとして答えると、あいつはニッコニコして箱から一本煙草を出した。

「すげえ、新品だよお」

嬉うれしそうに火をつけて... あ～あ～あ、吸い方がホームレス！

彼は... かつこよかったわ... DUNHILLの煙草とライターが似合ってた...

それにくらべて、こいつはっ！ 三本指でせっこーく持ちちゃって、あ～あ、

だいたいあの前髪がうっとおしいたら！ 口の中に入りそうじゃない！

「あんた、前髪あげなさいよ」

「え？」

「見てるだけでうっとおしいのよ！ ほら、手で上にあげて！」

「う、うん」

あいつが前髪かきあげて... ドキッ！

こ、こいつ、なに、こいつ、ちょ、ちょっと、いい男...って、
バ、バカじゃない？ ホームレスに何ドキッとしてんのよっ!?

疲れてるんだわ、そうよ、今日は... そうよ... いろんなことがありすぎて...

「私、寝る」

そう言って立ち上がった私をあいつが煙草持ったままでポケーッと見てる。

「なによ？」

「あのお、俺は... どうすれば...」

「エ？ あ...」

そ、そうだ、忘れてた... 私が連れてきて... でも、こいつを泊めるなんて、どうしよう...

でも、今さら帰れなんて言うのも... 終電もないし、だいたいあの格好じゃ乗れないだろうし...

「ねーちゃん、俺に、なんか用があったんじゃねえの？」

「用なんかないわよ！ た、ただ、酔っ払ってて、それで、勢いで連れてきちゃったのよ！」

「あ？」

あいつはポカンと私の顔見て、そして、

「ハハハ、おもしれー」

おもしろくないわよっ！ほんとに何やってのよ、私！

「とにかく、今日は泊めてあげるわよ」

イヤだけど...

「エッ？ いいの？」

よくないけど...

「なんか悪りいなあ」

ニコニコしてるけど...

「あんた、そこでいいでしょ？」

私がキッチンの隅っこを指差すと、あいつはニコニコして、うんうんとうなずいた。

ベッドルームから毛布を一枚持ってきて、キッチンの隅っこに座ってるあいつに投げた。

「ありがとなあ」

バカみたい、私、こんなやつ泊めることになっちゃって、何やってるの？

「絶対、私の部屋に入ってこないでよ？」

「うん」

「入ってきたら警察呼ぶからね！」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ！ わかった？」

「うん」

フーッ... ため息出ちゃった。

パチンとキッチンの電気を消すと、

「ねーちゃん、おやすみ」

「え？ あ、お、おやすみ」

ボタンとベッドルームのドアを閉めた。

おやすみなんて... 誰かに言われるのなんて何年ぶりかな...

バカみたい、どうでもいいわよ、そんなこと！

ベッドルームの電気を消して、ベッドにもぐりこんだ。

明日...起きたら...シャワーを浴びて...明日...行かなきゃ...

電話

プルルプルルプルル...

ン... あたま... 痛い...

プルルプルルプルル...

なに...朝...なの... 片目をあけて目覚ましを見ると... 6時半か。
ああ...頭がボーッとしてる...シャワー浴びなきゃ...

あくびしながらベッドルームを出ると、あいつはまだキッチンの隅っこで寝てる。
ハア〜ア、気楽なもんね。私はなんとなく、あいつのそばにいったみた。
毛布から覗いてる寝顔が、ほんとに、ただの20歳の男の子よねえ。
な〜んでホームレスなんかやってんだろ？ 人生捨てちゃってさ。 べつにいいけど。

シャワーを浴びながら... 彼の顔を思い出して... ゆうべのことは...本当なの？
信じられないのよ、どうしても、だって、私の恋人なのよ？ 何も言ってなかったのよ？
専務の早とちりとか？ そうよ、お見合いは...したかもしれない、だって、断れないでしょ？
専務に言われたんじゃ、いちおうはするわよ、しかたないわ。
でも、婚約なんて、そんなこと、あるはずないじゃない！
そうよ、私に何も言ってないもの。
あの場では「ちがう」って言えなかったのよ、専務の手前、そうよ、きっとそうだわ！
彼に電話してみよう。まだ会社に行く前に。

急いで髪の毛を乾かして、バスルームを出ると、まーだ寝てる！ いいけど。

キッチンに置いてたカバンから携帯を出して、彼にかけた。

「もしもし」

彼の声... ホツとする...

「もしもし、私」

「どうした？」

「え... あの、ゆうべの専務の話なんだけど」

「専務の話？」

「あの、ほら、あなたと専務の娘が婚約って...」

「ああ、あれか」

「ちがうわよね？」

「まだだよ」

「え？」

「でも、すると思う」

「エッ？」

「うちの両親も喜んでるしね」

両親... そ...そこまで...？

「で、でも、あなたは私と...」

「結婚と恋愛は別だよ」

「え...？」

「君だってそのつもりだったろ？ 自立した女でいたいって言ってたじゃないか」

「そ、そうだけど...」

「君は割り切ったつき合いができる人だよ、自立したおとなだ」

そ...ん...な...

「どうして...もっと早く言ってくれなかったの...」

「言う必要はないだろ？ 俺の人生プランは君には関係ないんだから」

「そ、そんな、そういう問題じゃないでしょ!？」

「どうしたんだよ、昨日からヘンだよ？」

「ヘンって、だって、私、私の、私のお腹にはあなたの赤ちゃんがいるのよ！」

「だから、それはもう話がついてるはずだろ」

「話って、だって、そんな、そんな簡単なことじゃないでしょ？」

「処理すればいいだけの話じゃないか」

「そんな...」

「そろそろ出るから切るよ？」

「待って！」

電話の向こうから彼のため息が聞こえた。

「なんだい？」

「もし... もしも、私が、あなたの子どもを産むって言ったら？」

沈黙

なぜ黙るの？ 困ってるの？ どうするの？ 答えてよ！

「俺には関係ない」

「か、関係なくないでしょ!? あなたの子よ？」

「おいおい、君らしくないよ、いつも凜としてるのが君の魅力だろ？」

私の魅力...って...あなたは...私を捨てたのに...

「それじゃ、あとで」

「待って」

彼は今度はわざとらしくため息をついてみせた。

「まだ何かあるのか？」

「私... 今日お休みします」

「そう」

「あなたの子どもを墮ろしてきます」

「そう」

そうって... それだけ？

「総務には風邪ということ saying おくよ、そのほうが君もいいだろ」

私が？ あなたがでしょ？

「それじゃ、お大事に」

ピッ。

お大事に...

何がお大事になのよ... バカみたい... なによこれ...

バカらしくて涙も出ない... 胸の真ん中に鉛の塊があるみたいで...

何をやってたの、私... 何を見てたの...彼の...何を...

スッと目の前が白くなって、思わずその場にしゃがみ込んだ。

「ねーちゃん！」

グッと抱きかかえられて... え？

「大丈夫か？」

あいつが心配そんな顔で私を見てる。

「ちょっと貧血起こしただけよ」

私は、手を振り払って立ち上がった。

ホームレスなんかに心配されて... どん底だわ...

聞いてたのかしら...聞こえたわよね...すぐそばで...

「あんた、もう帰って」

「う、うん」

「あ、ちょっと待って」

私はカバンから2万円出した。

「これくらい出せば、タクシーに乗せてくれるわよ」

「いいよ、俺、歩いてくからよ」

「だって、電車でだって20分はかかるのよ？」

「どうせヒマだしよ」

あいつがそう言って笑った。いいけど、べつに、好きにすればいいわ。

でも、こいつ、脚が、たしか、ケガして脚が悪いって、だって、ほら、今だって玄関までヒョコタンヒョコタン歩いて、それで、あの駅まで歩けるの？ いいけど、関係ないけど。

私は煙草に火をつけて、あいつが玄関の外からビニール袋を入れて、

タタキのところで着替えるのを、ボーッとキッチンから見てた。

あいつがパジャマの上を脱いで、え？

わ、割といい身体してるのね...って、何考えてるのよ！

今度はズボンも脱いで、ウッ... ほんとだ... 右足に膝のちょっと上から縦に太いケロイド...

あいつが私の視線に気づいてビクッとこっちを見た。

あっ！ や、やだ、イヤラシイ女だと思ったかな...って、

べ、べつにイヤラシイ目で見えたわけじゃないわよっ！

チラッと横目で見ると、あいつがトランクスを脱ごうと...

「あっ！ ちょっと、あんた！」

あいつがあわててトランクス引き上げて、こっちを見た。

「パンツは履いてってよ！」

「え？」

「あんたが一回履いたやつなんて、どうせ捨てるんだから！

ていうか、私が捨てなきゃいけないんだから、イヤよ、触るの！」

「ハハハ、ほんじゃ、ありがとな」

お礼言われることじゃないわよ。

あいつがビニール袋からボロを引っ張り出して着始めた。

ボロボロで穴だらけの汚れたズボン、ボロボロで煮しめたような汚いシャツ、

その上に擦り切れて汚れたジャンパー、そして、穴だらけの汚いゴム長履いて...

またホームレスに戻った。ううん、なんか、ちがう、なんか、顔とボロが、ちぐはぐで...

「ちょっと、あんた！ 脱ぎなさいよ！」

「へ？」

「せっかくお風呂入れてやったのに、そんな汚ったないボロ着たら、また汚れちゃうわよ！」

「で、でも、俺、こ、これっきゃ」

「いいからさっさと脱いで！」

「え、あ、う、うん」

あいつはチラチラ私の顔見ながら、またボロをビニール袋に入れると、

トランクス一枚で情けな〜い顔で立ってる。

「その袋の口、しっかりしばってよ」

「う、うん」

あいつは目をパチクリさせながらビニールの口をギュッとしばった。

私はツカツカとそばに行ってビニール袋を引っつかんだ。

「それ着て、待ってて」

床に置いてあった、さっきまでこいつが着てたパジャマを指差した。

「あのお、俺の服は...」

「捨てるのよ！」

「エッ？」

「今日は燃えるゴミの日だから、ちょうどいいわ！」

「あ、ちょ、待っ、そ、そんな中に」

「なによ、大事なものでもあるわけ？」 そんなものあるわけっ？

「う、うん」

あいつがビニールの口を開けた。ウッ... く、臭いっ！

「え...っと...」

あいつはボロジャンパーを引っ張り出してポケットから、何か取り出した。

「なにそれ？」

「これ、ねーちゃんにもらった俺のハンコと3万」

「3万？ なにそれ？」

「あの、ほれ、指輪拾ったときにくれたじゃん」

「あ、あんた、使わないでとっといってたの!？」

「うん」

「バッカじゃない!? とっといたってしょうがないでしょ！ 何考えてんのよ！」

「使えねえんだ」

「ハ？」

「俺みてえのが万札持ってっと、盗んだんじゃねえかって思われんだよ」

「え？」

「この前も、とっ捕まりそうになっちゃってよ、俺、走れねえのに走った走った、ハハハ」

「そんな...ちゃんと理由を言えばいいじゃない」

「言ったけど、信じてくんねえんだよ」

そう言って情けな〜い顔で笑った。

「そう...なの...」

「だから、これ、返すわ」

「い、いいわよ、返さなかったって」

「持ってても使えねえしよ」

あいつが私の手にクシャクシャになった3万を置いた。

お金も使えないって...なにそれ...ひどい...

「でも、これは俺の名前だからよ」

あいつは嬉しそうにそう言いながらハンコを見てた。

なんか、私、なんか、胸のあたりが、なんか、ヘン...

「ちょ、ちょっと、あんた、私が帰ってくるまで、出てっっちゃダメよ！」

「う、うん、つうか、俺ハダカだし」

「そうけどっ、何か盗んだりしたら、警察呼ぶからね！」

「ハハハ、うん」

私は、片手にくっさいビニール袋、片手にクシャクシャの3万を持って部屋を出た。

病院

近くのスーパーは朝の8時半からやっている。

衣料品コーナーってどこ？ こんなところで服なんて買ったことない。

えっと、男性用品...

私、何してるんだろう...なんて考えたってしょうがないわよ、あのボロは捨てたんだから！

20歳の男の子ねえ... 何がいいわけ？ なんだっていいじゃない！

どうせあんなボロしか着てなかったんだから、なんだっていいわよ！

そうね、このグレーのジャージなんかいいんじゃない？

どうせ、ずっと座ったままなんだから、こういうのが楽よね。

何サイズなんだろ？ L？ 痩せてるけど身長高いものね、Lでいいわ。

あとは、このモスグリーンのトレーナー？ 汚れが目立たなくていいかも。

あっ、こっちのモスピンクも可愛い！ 若い男の子がピンク着てるのって可愛いのよねえ...って

、

ツバメにプレゼントするマダムじゃないんだから！ だいたいマダムはスーパーで買わないわよ！

このモスグリーンでいいわ。あとは、ジャンパー？ あ、これなんか表が防水で裏が起毛だから雨が降っても寒くてもいいかもね！...って、ホームレスするため用に考えてるわ、私...

だって、ホームレスなんだもの！ あとは靴下も買う？ そうね、それから、下着用のTシャツも。

あっ、靴！ ゴム長の方がいいのかな？ でも、ずーっとゴム長履いてるから余計臭いのよ！

スニーカーがいいわ！ でも... 何センチ？ あのゴム長、何センチくらいだった？

わかんないわよ！ あんな汚ったないゴム長なんてジッと見なかったもの！

いいわ！ 大は小を兼ねるよ！ この28でいいわ！

ドアを開けると、あいつがパジャマ着たままタタキのところに座ってた。

「あんた、なんでこんなところに座ってるの!？」

「ここで待ってろって...」

「ここって、私の部屋ってことよ！」

「ああ、そうなんかあ、ハハハ」

バッカじゃない？ 犬だってもっと頭使うわよっ！

私はキッチンのテーブルの上にドサッとスーパーの袋を置いた。

「これ着て！」

「え？」

「早く！」

「う、うん」

あいつが目をパチクリさせながら、袋から服を取り出した。

「すげえ！」

どこがすごいよ、スーパーの服じゃない！

あいつがパジャマの上を脱いで... あ... やっぱいい身体...って、ちょ、ちょっと、

「あっちで着替えてよ！」

「あ、うん」

あいつがスーパーの袋を持って玄関のタタキに...

「ちがうわよ！ バスルームよ！」

「あ、うん」

ハア... まったく、正常な日常生活ができないのね、ていうより常識？

まあいいわ、着替えたら出ていってもらうんだから！

バスルームのドアが開いて、あいつが出てきた。 エッ？

な、なんか、まともな、青年...

「すげえなあ」

嬉しそうにそう言って服を触ってる... フツの男の子...って、なに感心してんのよっ！

「それじゃ、もう出...」

ゴルッグルギョルギョルルル～

な、なに？

あいつがあわててお腹押さえて情けな～い顔で笑ってる。お腹の音？

「あんた、いつから食べてないの？」

「えっと、おっといかなあ」

「おとといーっ!? あんた、3万も持ってて、あ... そ、そうね、使えなかったのよね」

あいつが情けな～い顔で笑った。

「いいわ、それじゃ... 食べに行きましょう。私も... そのまま行くから」

カバンをつかんで、スタスタと玄関に出た。

駅前のイタリアレストラン。

私の目の前で、あいつがズルズル音立ててミートソースをガッツガツ食べてる。

「ちょ、ちょっと、あんた！」

私はあいつに顔近づけて、声押し殺して言った。

「お皿に顔近づけて食べないでよ！ 犬じゃないんだから！」

「あ、う、うん」

「それから、その片膝！ 椅子の上に立てて食べるのやめてよ！」

「あ？ う、うん」

あいつはあわてて脚を椅子から下ろした。

「椅子座ってメシ食うの慣れてねえんだ」

そう言って笑った。

こんなところに連れてきたのが間違いだったわ。コンビニで何か買ってやればよかったのよ。

でも、もう来ちゃったんだからっ！ あ——、バカよ、私。昨日から何やってるの？

「ごっつおさん」

あいつがミートソースで真っ赤になった口を手の甲で、

「ちょっとーっ！ 手で拭かないでよ！ ほら！」

私はあわてて紙ナプキンを渡した。

「ねーちゃんって、お母さんみてえだな」

あいつがそう言ってニッコリした。

「じよ、冗談じゃないわよっ！ あんたがっ」

あっ... こ、声大きかったわ。

「あんたが」

私はあいつに顔近づけて、

「行儀悪すぎるのよ！」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ、まったく！ あんたの親、どういうしつけしてたのよっ!？」

「いねえんだ」

「し、死んだの？」

「わかんねえ」

「わかんないってなによ？」

「俺、捨てられてたんだ」

「エッ？」

「駅の便所に」

あいつはそう言って情けな〜い顔で笑った。

「そ...そう...なの...」

私は、なんか、落ち着かなくなっ、煙草に火をつけて、箱をあいつの方に押した。

「もらっていいの？」

「え、ええ」

あいつは嬉しそうに箱から一本取り出して火をつけた。

こいつ...捨てられて...駅のトイレ...なにそれ、ひどい...なのに、こいつ、ヘラヘラ笑って...

なに、私、なに、同情？ バ、バカみたい、私に関係ないわよ！

「行くわよ！」

伝票持って立ち上がった。

駅に入って切符を買った。

あいつがいつもいる私の会社の駅まで。そして、私はその途中の病院のある駅で降りる。

そうよ、こんなもの、さっさと処理してスッキリするんだわ。

電車に乗っても、今日は誰もヘンな顔して見ないのね。そりゃそうね、どう見ても普通の男の子

。

今からあの駅に戻って、またホームレスするなんて誰も思わないわよね。

そして... 今から私が子どもを墮ろしに行くなんてことも... 誰も気づかない...

そうよ、誰も気がつかないうちに、さっさと処理して、何もなかったことにするのよ、何も...

私の降りる駅が近づいた。

「それじゃね」

私は、あいつの顔も見ずに立ち上がった。

「ねーちゃん、どこ行くんだあ？」

「病院よ」

私はできるだけ、なにげなく聞こえるように言った。まわりの乗客がなんとも思わないように...

。

「あんたの降りる駅、わかってるわね？ 山下町よ？」

「あ、う、うん」

ドアが開いて、私は他の人たちと一緒に、なんともない顔して降りた。

そして、階段に向かって...って、エ？ ハ？ エッ!?

「ちょ、ちょっと、あんた！ なんで降りちゃったのよおっ!？」

あいつが私のとなりで情けな〜い顔して笑ってるうううっ！

「なにやってんのよ！ あんたの降りる駅は、あと5個先なのよっ!？」

「う、うん」

あいつは相変わらず情けな〜い顔して笑ってた。

「うんじゃないわよ！ まったく！ もう少しで次の電車が来るから、それに乗りなさいよ？」

「一緒に... 行くよ」

「ハ？」

「ねーちゃんの病院」

「よ、余計なお世話よ！ なんであんたがついてくるのよっ!？」

「俺... 名前書いたから」

「バッカじゃない!? ただ名前借りただけでしょ!？」

「うん」

「うんじゃないわよ！ 次の電車でさっさと帰って！」

私はクルッと背を向けてカツカツと早足で歩いた...というか、もう走った。

あいつ、脚が悪いから走れないのよね！ 階段も走り降りて改札出て、振り向くと、いない。

なんだ、あきらめて帰ったのね。 まったく、何考えてるのよ！ 冗談じゃないわ！

あんなホームレスと病院行くなんて、冗談じゃないわよ！

駅から歩いて5分、表通りから小路を抜けて崩れかけたような病院に着いた。

待合室には、妊婦が2人とおばあさんが一人。

よくこんなところで子ども産む気になれるわね。私だったらイヤだわ。

産むなら、ちゃんとした大学病院で産みたいわ。産むなら...ね。

産まないわ、子どもなんて、だいたい子ども嫌いなんだもの。

そうよ、さっさと処理してサッパリしよう。

「北川さ〜ん」

「はい」

立ち上がると、妊婦とおばあさんが私の方を見た。

私は、そうね、まるで生理不順で診てもらいに来た...って顔して、診察室に入った。

下半身だけ脱いで、処置台に乗った。

なんだ、いちおう手術だから手術着でも着せられるのかと思ったら、簡単なものなのね。

「それじゃ、麻酔しますからねえ」

そう言って看護婦が注射を打った。

「1から20まで、声を出してゆっくり数えてくださいね」

はいはい。

「1、2、3、4、5、6...7...8.....9...じゅ...」

目の前が白く...そして...なにも...

おにぎり

気がつくと...

固いベッドの上だった。

あ... なんかスッキリしてる...

なんか調子が悪かったのって... やっぱりツワリ...

よかった... 終わった...

なんだ、思ったよりずっと簡単だった...

寝てる間に終わってた...

まだ頭がボーッとしてるけど、なんかよく寝たってカンジだわ。

そうね... 悪い夢から覚めた... 昨日のことは全部悪い夢...

バカみたい、現実よ。

起きよう。

身体を起こすと、ちょっとめまいがしたけど、これくらいなら大丈夫ね。

ドアが開いて、看護婦が入ってきた。

「あら、起きたの？」

「はい、お世話になりました」

「北川さん、よく寝てたわねえ、2時間くらいで麻酔が切れるはずなんだけど、

ぜんぜん起きないから、そのままにしてたのよ」

看護婦がそう言って笑った。

「え？」

腕時計を見ると、エッ!? 4時!?

「あ、あの、今、夕方の4時ですか？」

「そうよ」

なに、私、何時間寝てたの？

「どう？ 立てる？」

「は、はい」

「お家の人に迎えにきてもらえるの？」

「いえ、一人暮らしなので」

「そう、無理しないでゆっくり帰ってね」

「はい」

駅もすぐそばだし、大丈夫だわ。

支払いを済ませて、これで終わった...!

病院のドアを開けると、あたりはすっかり夕方...!

フウ〜ッて息を吐いて、外に出ると、え、ハ? エッ!? ウ、ウソ! エーーーーッ!

玄関の脇に、あ、あいつが座ってる――っ!?

「あ、あ、あんた、なにやってんのおおおっ!?

「あ、ねーちゃん」

あいつが私を見てヨタヨタ立ち上がった。

「あ、あんた、あんた、なんで、ここ、ちょっと、なんでいるのよおおおっ?」

「ねーちゃん走んの早えから、俺、必死こいて走ったよお」

あいつがそう言いながら情けな〜い顔して笑った。

「そ、そうじゃなくて! なんで、い、いつからいるのよっ?」

「ねーちゃん中入って、そんで、ずっと」

「ハァァァ? ずっとって、あんた、何時間もここにいたわけ?」

「うん」

「バツ、バツじゃないの――っ!」

あいつは、ボリボリ頭を掻きながらヘラヘラ笑ってた。

「なによ、あんた、なに、なんで、わけわかんないわよおお」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ! まったく! 何考えてるのよ!」

「ごめんなあ」

「ごめんじゃないわよ! こんなとこで何時間も、何考えてるのよ!」

「俺、待ってたかったからよ」

「ハ?」

「俺、なんもできねえけど、なんか、ねーちゃんのそばにいたくてよ」

「え?」

「俺、ヒマだけはいっぱいあっからよ」

あいつがそう言って情けな〜い顔で笑った。

「よ、余計なお世話よ」

「うん」

「たいしたことなかったわよ、寝てる間に終わってたわよ、あんなことなんともないわ」

「うん」

あいつは微笑んで、そして、私の頭を...撫でて...

「な、なによ」

子どもじゃないんだから、頭なんか撫でられたって、ちっとも...なによ、頭なんか...

撫でられて...なんで、私、涙が出てくるのよ...なんで、涙が止まらないのよ...

「べ...べつに...」

私、バカみたい、しゃくりあげて、バカみたい...

「悲しくて泣いてるんじゃないんだからね!」

「うん」

あいつの声が優しくて... なによ、バカみたい...

「なんで...泣いてるのか...わかんないんだからね！」

「うん」

「なによ...バカ...」

「うん」

「なによ、そんな...優しい声出さないでよ...」

「うん」

「ほら、またあ！ もう、あんたなんか、あんたなんか、バカァ！」

私は、なんか、わからない、なんか、ただ、あいつの胸に飛び込んで、

バカみたい、子どもみたいに、ワーワー泣いて、バカみたい...

ちっとも悲しくないのに...後悔なんかしてないのに...なんで私泣いてるの...

こんな20歳の子に頭を撫でられて、抱きしめられて、なんでもっと涙が出てくるの...

こんなやつ...こんな...ホームレスなんか...汚くて、臭くて、そばになんか...なのに...

なんで私は...バカみたい...なのに...私...

「おねがい...そばに...いて...」

「うん」

あいつの優しい声が耳元で...あいつが私を抱きしめて...バカみたい...私...

なに言って...バカみたい...なんで、こいつの腕の中で...ホッとしてるの...

電車に乗って、バスに乗って、私のマンションに... また連れてきちゃっ...た。

バカみたい、私、バカみたい、バカみたい、バカみたい———っ！

どーするのよおおっ!? えっと、どうしよう、えっと、と、とにかく、

「コ、コーヒー飲む？」

あいつと向かい合って、コーヒー飲みながら、煙草吸って、チラッとあいつを見ると、ヘラヘラとした顔で煙草吸ってる。

ほんとに、あんた、お気楽だわ...。

そ、そうよ、たしかに私言ったわよ、言っちゃったわよ、そばにいてって...

でも、あれは、なんていうの？ 感情的になってたっていうか、異常心理状態っていうか、

だってそうでしょ？ やっぱ子どもを墮ろすって、女にとってはタイヘンなことで、

まあ、アツという間に終わったんだけど、たいしたことないと思ったのも本当なんだけど、
だけど、こいつがあんなところに何時間も、それに、でも、だって、ほら、いろいろあって、
そうよ、いろいろあったじゃない、だから、なんていうか... バカだわ...

「私、寝る」

ボタンとベッドルームのドアを開めた。

ダメ、今はなんにも考えられない。ドタ〜ッとベッドの上に、そして、真っ白。

目を開けると、真っ暗...！ 今何時？ ベッドサイドの目覚まし見ると、8時？

すっごい、爆睡してた...！ やっぱり疲れてたのかも。

あいつは... いるわよね。 そりゃいるわ... 他に行くところないんだもん。

連れてきちゃったんだし。あーっもーっイヤ！

ボタンとドアを開けると、あれ？ あいつは？ 帰ったとか？ なわけないじゃん！

ベランダのドアが開いてる。見ると、あいつが身を乗り出すように下を覗き込んで、

「あっ、ちょ、ちょっと！ 危ないわよ！」

思わず襟首引っ張った。

「あ、ねーちゃん」

あいつが振り返ってニッコリ笑った。

「ねーちゃんじゃないわよ！ 危ないでしょ！」

「なんか下の方にネコがいたんだよなあ」

「いるわよ、そりゃ、この辺ノラネコがウロウロしてるんだから」

ゴミ箱荒らしてイヤになるったら！

「ねーちゃん、腹へってねえ？」

「え？ あ... まあ...ね」

そうよね、こいつ、お昼も食べてないし、夜だって食べさせてないし。

どうしよう、今からだったらファミレスくらいしかないわよね。

「俺作ったから」

「ハ？」

「作ったっつっても、メシ炊いて握りメシ作っただけなんだけだよ」

あいつが情けな〜い顔で笑って言った。

「えっ、あの、あんたが作ったの？」

「うん、米あったから、あの、勝手に使っちゃったけど...」

「それはいいけど... あんた、ごはんなんか炊けるの？」

「ハハハ、働いてたときは一人暮らししてたからよ」

「へえ」

チラッとテーブルの上を見ると、デーッカイおにぎりが4個。

ノリもゴマもついてない真っ白なだけのおにぎり...!

「食う？」

「え... あ... え、ええ」

椅子に座って、デッカーイおにぎりと向かい合って、あいつが作った...

この目の前に座ってる、ホームレスが、あの手で...

「あ、あんた、手、洗った？」

「あ？」

「これ握るとき、ちゃんと手を洗ったの？」

「ハハハ、うん、ちゃんと洗ったよ」

「そ、そう... それじゃ...」

おにぎりを手にとって、お、重もつ、土方の弁当じゃないんだから、こんなデッカーイ...

ま、まあ、いいわ。

「いただきます」

パクッ。 あ... おいしいかも。

なんていうの？ 塩かげん？

「ほんとは梅干しかなんか入れようと思って探したんだけど、見つかんなくてよ」

そりゃそうね、だって、

「梅干なんて買ってないもの」

「そっかあ」

だって、実は、私、料理って苦手なのよ... 一人で作るのなんてトーストとコーヒーくらい、あとはカップメン？ だから、冷蔵庫の中には、食材なんて入ってないのよね。

「あんたも食べたら？」

私はお皿をグイッとあいつの方に押しやってやった。

「うん」

あいつは一個つかんでパクッと、ハァ〜、シアワセそうな顔して食べるわねえ。

誰かにごはん作ってもらったなんて、何年ぶりだろう。

高校卒業して、こっちに来てからは、ずっと一人だった。

起きたら、ごはんができてるなんて、久しぶりだよなあ...って、ダ、ダメ、ダメ、何浸ってるのよ！

「あのね！」

私はドンッと食べかけのおにぎりをお皿に置いた。

「ン？」

あいつが口のまわりにごはん粒つけてこっちを見た。

「ちょっと、あんた！そこにごはんついてるわよ！」

「え？ あ、ハハハ」

あいつが手で口のまわりを拭いて、ポロツと床に落ちたごはん粒までパクツと...

「あーっ！ 床に落ちたのなんか食べないでよ！」

「あ、うん」

あいつが情けな〜い顔で笑った。まったく、犬じゃないんだから！って、ち、ちがう！ そんなことはどうでもいいのよ！

「あ、あのね、私が、あの、なんていうか、そ、そばにいてって言ったのは、あの、そんな、深い意味はなくて、ただ、なんていうか、つい、だから、あれは、あのときだけの、ちょっと口から出ちゃったっていうか...」

「うん」

あいつがニッコリ笑った。

「いや、あの、うんって、わかってるの？」

「これ食ったら出てくからよ」

「え... あ、そ、そう」

なに、それ、ずいぶん簡単に、まあいいけど、わかってるならいいのよ。

「ごっつおさん！」

あいつが手をトレーナーでぬぐいながら立ち上がった。

「あのお、これ、もらっちまってもいいの？」

あいつがそう言ってトレーナーをつまんでみせた。

「あたりまえでしょ、そんなの私が持ってたってしょうがないわよ」

「ありがとなあ」

あいつはニコツと笑って、

「そんじゃ」

そう言うと玄関の方へ...

「ちょ、ちょっと！」

振り向くあいつに、私、何を言おうとしたの？

「あの、こ、これ」

財布の中から1万円札を出して、

「電車代と...いろいろ...持ってって」

あいつが私の顔を見て・・・

「ねーちゃんさ... あんとき、金やるからって言わなかったんだ」

「え？」

「そばにいてくれって、俺に言ったとき、金やるからって言わなかった、そばにいてくれって... そんだけで... 俺、すげえ嬉しかったよ」

「え...」

あいつはニッコリ笑って、そして... 玄関のドアが閉まって...

なに...それ...

そばにいてくれって...それだけだから...それで...嬉しいって...

なによ、それ、なんなのよ、お金あげるって、言わなかったのが、嬉しいって、そばにいてくれって言ったのが嬉しいって、なによ、それ、なんなのよ！

私はボタンと玄関のドアを開けた。

ヒョコタンヒョコタン歩いてるあいつの背中。

「ちょっと、あんた！」

あいつがビックリした顔で振り向いた。

「あんなバカデカイおにぎり、私一人じゃ食べきれないわよ！」

あいつがポカンとした顔で私を見て、そして、情けな〜い顔で笑った。

仔猫

あれから一ヶ月が過ぎた。

私は新しい企画の主任補佐として、バカな吉田をしっかりフォローしてやってるわよっ！

「だ～って、俺の企画じゃないからさあ、よくわかんないんだよねえ」
「バカじゃない!? あんた主任でしょ? そのくせ威張りくさっちゃって、
「ちょっと、君! ここの計算違ってたじゃないか! 課長に叱られたんだぞ!」
事務の女の子に当り散らして、バカみたい!

「主任」

私はニッコリ笑って吉田のそばに行った。

「これ、主任の判が押してありますよね?」

私は書類の下の「吉田」の文字をトントンと爪で叩いてみせた。

「ということは、主任が確認したってことですよね?」

「ま、まあ、それは形だけで...」

「形だけってでも、主任は主任なんですから、判を押した以上は主任の責任ですよっ」

「ウグッ...」

吉田がジト～ッと私を見上げた。

「キチンと確認してから判を押していただかないと、私たちとしても仕事がやりにくいです!
わかります? しゅ・に・ん!」

吉田が真っ赤な顔してうなずいた。ハンパなことやってるんじゃないわよ! フン!

化粧室で口紅直してると、さっき叱られてた女子社員が入ってきた。

「あ、北川さ～ん、さっきはありがとうございましたあ」

「なんのこと?」

私はツンとしながら手を洗った。

「かばっていただいて、嬉しかったですう」

「あなたのために言ったんじゃないわよ」

「え?」

「それじゃ」

ドアを開けて出ていこうとすると、

「あ、北川さん、後ろの方にいっぱい毛がついてますけどお」

「え?」

振り向いてスカートのお尻を見ると、ギャーッ! 白い毛があちこち張り付いてるうううっ!

「これって、ネコの毛じゃないんですか?」

「え、ええ」

「わあ、北川さん、ネコ飼ってるんですか？」

「え、ええ、まあ...」

「わあ、私もネコ大好きなんですう」

「あ、そう」

私は指で一本一本張り付いた毛を、まったく、なによ、これえっ！

「北川さんのネコちゃんって何種ですかあ？ ロシアンブルーとかペルシャとか？」

「なにそれ？」

「え？ ネコの種類ですけど？」

「あ、ああ、あれは... 多分... 雑種よ」

「え？」

「雑種のメス」

...と、ホームレスのオスを一匹、飼ってるの、私...！

そう、あの日から、ずーっというのよ、あいつ。

だ、だって、しょうがないじゃない！

次の日はすごい雨で、あんな日に出ていけなんて言えなかったし、

次の日も雨で、それから、ちょっと私が熱出したりして、看病してくれて、

それに、会社から帰ってくると、ごはんができてて、

あいつ、すごい上手なわけじゃないけど、私よりは数倍料理がうまくて、

それに、清掃の仕事もしてたことあるって、トイレとかあちこちきれいに掃除してるし、

それに、なんか私って... 奥さんもらった方がいいんじゃないかなあってくらい、

なんかこの生活がヘンにシックリきてて...

わ、わかんないけど、いるのよっ！

もちろん、SEXなんかしてないわよ？ 冗談じゃないわよ！ 6つも年下なのよ？

子どもじゃない！ しかもホームレス！ あいつとSEXなんか、ぜったいや！

だけど、あいつ、な〜んかジャマにならないっていうか...

でも、このままじゃ私は困るのよ！ 一生あいつのこと置いておけるわけないんだから！

私だって、もう26よ？ 結婚だってしたいし、いつ新しい彼ができるかわからないでしょ？

なのに、あいつがいたら... まさか、「私のペットなの」で通用するわけないじゃない！

だけど、今は... とにかく、なんか、わかんないけどいるのよ！

でも... そう、昨日...

あいつが、ノラの小猫を拾ってきたの。

会社から帰ったら、いたのよお、痩せこけて小さいネコが！ 私の部屋に！

「ちょ、ちょっと、あんた！ こ、これ、なによ!？」

「ゴミ捨てに行ったら、こいつがいてよ、ケガしてたから連れてきたんだ」

「どうするのよ、こんなネコ！」

「置いてやっちゃダメかなあ？」

「ダメにきまってるでしょ！ マンションよ？ ペットなんか飼えないわよ！」

「管理人のおばちゃんは、外に出さなきゃいいつつったんたけどよ」

「か、管理人？ あんた、管理人としゃべっちゃったわけーっ？」

「うん、こいつ抱いてたら、ちょうどゴミ捨て場んところに来て、そんで…」

「あ、あんた、自分のことなんて言ったの？」

「あ？」

「あ？じゃないわよ！ 管理人さんに私の何だって言ったの？」

「俺はなんも言わなかったけど、おばちゃんが勝手に弟だと思ったみてえで」

「弟？」

「うん、俺が、ねーちゃんねーちゃんつつってたら、あんた北川さんの弟なんだねって」

「私は一人っ子よ！」

「でも、おばちゃんは…」

「まーったく、あんたは、もう！ こんなネコ捨ててきなさいよ！」

「でも、ケガしてんだよ」

あいつが小猫の脚を持って見せた。

ウッ…ザックリ切れて膿んでる… で、でも、

「そんなこと私の知ったことじゃないわよ！ 私はネコなんか大嫌いなんだから！」

「俺が世話すっからよ」

「そーゆー問題じゃないのよ！」

「そんじゃ、ケガが直るまで、それまででいいから置いてやってくんねえかなあ」

「え…」

「ケガが直ったら、そしたら、あの…」

あいつが、すごく暗い顔で… な、なによ、そんな顔したってダメよ！

「あ、あの、こいつのケガが直ったら、俺、こいつ連れて出てくからよ」

「エ？」

「それまでは… 置いてくんねえかな？」

「な、なによ、それ…」

「ほんとは、もっと早く出てかなきゃなんなかつたんだけど、俺、ねーちゃんに甘えて、
なんか、ヒモみてえに、世話んなっちまって」

あいつがそう言いながら情けな〜い顔で笑った。

「ほんとは今すぐ出てきゃいんだろうけど、今こいつ連れてったら死んじまうからよ、
だから、こいつのケガが直るまで、こいつと俺、置いてくんねえかな？」

ケガが直るまで… 直ったら… 出ていく… ここを…

「そう、いいわよ、それで」

そうよ、いきっかけじゃない、だって、このままってわけにはいかないんだから。

いつかは出ていってもらわないといけなかったんだから。

その「いつか」が、ハッキリ決まったってだけじゃない。

だから、あと数日か、一週間か、まあ、それくらいで、こいつのと生活も終わり。

あ——、よかった！

「ミイちゃん、よかったなあ」

あいつが小猫を抱いてニコニコして言った。

「みーちゃん——っ？ なにそれ——っ？」

「あ？ こいつの名前」

「なんで私の名前つけるのよっ!？」

「あ、や、ねーちゃんの名前じゃなくて、ミイミイ泣いてたから、あの、ミイちゃんって」

「なにそのネーミング!? ダサイわね！」

「ご、ごめん、あの、そんじゃ、なんて名前にすればいいんかなあ？」

「知らないわよ！ いいわよ、べつに！ なんでも！」

どうせ出ていくんだから、そのネコも、あんたも...

最後の夜

あいつが小猫を拾ってきてから一週間。

小猫の傷はけっこう深くて、結局病院に連れていった。

膿を出して縫ってで、ちょっと！ 5万よ？ なにそれ？ ネコの保険ってないわけ？

「ごめんなあ」

あいつがすまなそうな顔で言ったけど、しかたないじゃない、まったく！

先生だって言ってたんだから。このまま放っておいたら炎症が広がって危なかったって。

「よかったなあ、ねーちゃんのおかげだなあ」って、

ネコなんか話しかけたって言葉なんか通じないわよ。

それに私は親切で病院に連れていったわけじゃないわよ。

あのままにして死んだりしたら祟られるかもしれないじゃない。それだけよ！

ベッドに寄りかかってポーッと煙草吸っていると、小猫が部屋の中に入ってきた。

ヒョコタンヒョコタンって、歩き方があいつとソックリ！ 投げ出した私の脚の上に乗って、ヨタヨタと私のそばに寄ってくる。

「ちょ、ちょっとお、ククク、く、くすぐったいわよお、フフフ」

「あっ、みいちゃん！」

あいつがドアから顔出した。

「そっち入っちゃダメじゃねえかよ」

あいつがあわてて小猫をつかんだ。

「ご、ごめんなあ」

情けな〜い顔で笑って、小猫を抱いたままベッドルームから出ていった。

そう、私のベッドルームには入ってはいけないことになってる。小猫も、あいつも…。

だって、そうでしょ？ 居候なんだから、勝手に入られちゃ困るのよね。

そうよ、私の部屋に入ってきて、懐かれたって困るのよ、どうせもうすぐいなくなるんだから…

そうね、もうすぐ、また前の生活に戻れるのよ、また私一人の…。

「北川くん」

課長が私を呼んだ。

あれ以来、彼とは個人的には話をしていない。

専務の娘とはどうなったのかしら？ どうでもいいけど！

「来月から一ヶ月、ニューヨークに行ってもらいな」

「え？」

「本来なら吉田くんが行くべきなんだが、まあ、元々は君の企画だし、君の方が語学力も上だ、君が行って交渉してきた方がいいだろうという上の意見なんだ」

ヤッ...ター————ッ！

「最低で一ヶ月、まあ一ヶ月半は見た方がいいだろう」

いいわよ、1年でも10年も、ニューヨークよ？ 行くわよ——っ！

「俺も一緒に行くことになってるからな」

「え？」

「一ヶ月は休みなしだ、その前に溜まってる有休でも取っておくんだな」

彼がそう言って笑った。

彼と二人でニューヨークへ... バ、バカみたい、何を期待してるの？ もう終わったのよ。

「今日は専務も交えて夕食会だから、そのつもりで」

「はい」

私は冷静に返事をして... ヤッタ... ヤッター——！ ニューヨークよ——っ！

あこがれだったのよね、ずっと行きたかったのよおお、そのまま住んでもいいわあ。

最終電車で帰って、部屋のドアを開けると、奥から小猫がヒョコタンヒョコタン走ってきた。

「ねーちゃん、お帰り」

あいつもヒョコタンヒョコタン走ってきた。

「なによ、まだ寝てなかったの？」

「ねーちゃん、遅えからどうしたのかなあと思ってよ」

「あっ、そうか、そうね、今日は仕事で、いろいろあったのよ」

「そっか」

「私ね、来月から一ヶ月くらいニューヨークに行くことになったの」

「え？」

「仕事だけどね、でも、夢だったのよ、ずっと！ ニューヨークで仕事するって！」

なんか私、興奮しちゃって、まだ飲み足りない気分。

「あんたもつきあってよ」

あいつの袖引っ張ってキッチンに行くと、隅っこに毛布がクシャクシャに敷いてあった。。

そう、ここに来てからずっと、あそこがあいつの寝場所。

冷蔵庫からワインを出して、あいつと私の前に置いた。

キーンと冷えた白ワインが、ハ——、おいしい！

あいつはグラスに顔近づけて、舌を、

「ちょっと、あんた！ 犬じゃないんだから！ グラス持って飲みなさいよ！」

「う、うん」

あいつがグラス持って、チビッと、

「すっ、すっぺー」

あいつがクシャクシャの顔をした。

「アハハ、なにその顔？ なによ、ワイン嫌いなの？」

「俺、あんま酒飲めねえんだ」

あいつがそう言って情けな〜い顔で笑った。

「ぜんぜん？」

「前に、あの、仲間のおっちゃんたちと飲んだら」

「仲間？」

「うん、あの、浮浪者の」

「ああ... その、仲間」

「それで、腰立たなくなっちゃったことあってよ、ハハハ」

「ガキね」

私はそう言って笑ってやった。

「や、やっぱ、ガキかな」

あいつがボリボリ頭搔きながら言った。

「ねーちゃんから見たら... やっぱ、俺、ガキかな」

「そりゃそうよ、だって...」

6つも下で...

「まだ20歳でしょ？」

「だよな」

あいつはボソッとそう言って情けな〜い顔で笑った。

「あんた、誕生日っていつ？」

「えっと、9月... 13」

「へえ、誕生日はわかってたのね」

「捨てられてた日なんだ」

「エッ？」

「役所の人が戸籍作んのに、いちおうその日を生まれた日って書いたんだって」

「あの、でも、あんた、名前はわかってるんでしょ？ 何かに書いてたとか？」

「森下駅って知ってっか？」

「え？ あ... 東南線のはずれの駅？」

「俺、あそこの駅の便所に捨てられてたから、それで森下なんだ」

あいつがそう言って情けな〜い顔で笑った。

「一男は役所の人がテキトーにつけたみてえだけど、ハハハ」

「ハハハって...あんだ、それで、拾われて、それで、どこにいたの？」

「施設」

「ずっと施設にいたの？」

「うん、中学卒業するまで」

「あんだ、中学まで行って、な～んで読み書きできないの？」

「ほとんど行ってねえんだ」

あいつはホリホリ頭搔いて、情けな～い顔で笑った。

「小学校んときは、なんつうか、イジメられて、んで、しょっちゅうサボって、つか、ほとんど行かなくて、だからぜんぜん勉強したことねえんだ、ハハハ」

私は... 煙草に火をつけて...

「中学んときは...やっぱ学校行かねえで...」

あいつがチラッと上目遣いで私を見て...

「院に入ってたりにして...」

「イン？ インってなに？」

「少年院」

「ヘッ？」

「傷害、恐喝、窃盗、そんで、ぶっ込まれた」

あいつはそう言って情けな～い顔で笑った。

こ、こいつ、そんな、そんなことしてたの———っ!?

「あ、でも、もうやってねえよ？」

「あたりまえでしょ！ まったく、あんだ、そんな、バッカじゃないの!？」

「うん」

「なにやってんのよっ!? そんなこと！ もう絶対やっちゃダメよ！」

「うん」

あいつがニヤニヤ笑って私を見てる。

「何ニタニタしてんのよ！」

「なんか... いいなあって」

「なにがいいなよ！ 私は怒ってるのよ！」

「うん」

「うんじゃないわよ！ まったく！」

あいつが、ジッと... 私を... な...なに...

「俺... 明日... 出てくよ」

「エッ...」

あいつはそばで寝ている小猫を撫でて...

「こいつの傷も直ったし」

あいつの顔がちょっとだけ苦しそうに歪んで...

「これ以上いたら...俺...」

あいつが私のことを見て...そして...

「ねーちゃんに迷惑かけちまうもんなあ、ハハハ」

そう言って、いつもの情けな〜い顔で笑った。

「そう、わかったわ」

私は立ち上がって、

「おやすみ」

ベッドルームに入った。

出ていった朝

ノドが乾いて目が覚めた。

ワイン飲んだからだわ... 何時？ 2時かぁ。 お水飲もう。

ボ～ッとしながらベッドルームを出て、真っ暗なキッチンへ。

電気つけたら起きちゃうわよね。暗がりの中をソロソロと...

「フンギャーッ！」

「キャーッ！」

ふ、踏んじゃったんだわ、ど、どうしよう。

「ごめんね、どこ？ ちょっと、ごめんってば」

しゃがんで床の上を探すと、小猫はあいつの首元に丸まって、フーツ...って、

「ちょっと、あんた、フーはないでしょ？ 置いてやってるのにさ！」

「クッククック」

あいつが毛布の中で笑ってる。

「な、なによ、起きてたの？」

やだ、ネコなんか話しかけてるの聞かれちゃったじゃない。

私は立ち上がって、流しでコップに水を入れて、ゴクゴク飲んだ。

「ミャ～ミャ～ミャ～」

なんか、悲しそうにないてるわよ？

「やだ、私、ケガした脚の方を踏んじゃったかも」

しゃがんで覗き込むと、あいつも小猫の脚をつかんで、

「なんともねえよ、ビックリしただけだな」

「ハァ... よかった」

「ねーちゃん、ほんとにネコ嫌れえなの？」

「キラ伊っていうか、触ったことないんでももの、うちの親、ネコとか犬嫌いだから」

「ちょっとだけ抱いてやってくんねえか？」

「え？」

「こいつ、ねーちゃんのこと好きみてえなんだ、すぐねーちゃんの部屋に

入ってこうとするしよ、だから、最後に一回だけ... 抱いてやってくれよ」

最後に...

「い、いいけど」

あいつが私の胸のところに小猫をそっと近づけて...

私の腕の中で、小猫が丸まって、私の手をペロペロなめた。

「ザラザラしてるう、くすぐった〜い、フフ」

そう言ってあいつを見ると、あいつが私を...ジッと...なに...私...どうして...
私の手...あいつの前髪をかきあげて...

ナニシテルノ...

せつない目が私を...

私は...あいつの頬に手を...あいつの手が...おずおずと...頬に置いた私の手を...
あいつが目を閉じて私の手を...にぎって...だから...私...わからない...だけど...
私...あいつの...くちびるに...そっと...KISS...あいつのくちびるが...微かに震えて...

ナニシテルノ...

だって...私...わからない...きっと...最後だから...ただ...それだけ...
なのに...私の腕はあいつの背中に...あいつの手がそっと...だけど...少しずつ...強く...
私を抱きしめて...私の首筋を...ぎこちなくくちづけで...震える指が...私の胸に...
ゆっくりと私の身体を...床に...私の胸に顔を埋めて...震えるくちびるで...

「はじめて...なの...？」

あいつはうなずいて...私の...

「あ...」

でも...私も...はじめてよ...こんな...ぎこちない...抱かれ方...

彼ハ手馴レテタ...

何ヲ考エテルノ...ソウ手馴レタ抱キ方...ナノニ...

あいつの震える指が...私を震えさせる...私の心を...どうして...こんなにせつなくするの...
泣きたくなるほど...胸が熱くて...なに...せつない目で私を見るあいつの顔が...

「ウ...」

少し歪んで...思わず漏らすあいつの声が...私を震えさせて...

私とあいつは...ずっと抱き合っていた...暗いキッチンの床の上で...

ン... イデデ... 身体が... 薄目を開けて見ると... 明るい... 朝？
ふと、となりを見ると、あいつが優しい目で私を見ていた。

「な、なに？ 起きてたの？」

「うん」

あいつは優しい目で微笑んで...

「や、やだ、起こしてくれればいいじゃない」

私は毛布の端で胸を隠して身体を起こした。

「シャワー浴びてくるわ」

ザーッというシャワーの音。頭から浴びて、バカみたい、私、ゆうべ、なにやったの？

あいつと寝るなんて、どうして？ 20歳の子どもよ？ しかも、そうよ、ホームレスよ？
憶えてるでしょ？ 最初に会ったあいつの格好！ あれと寝たのよ？ バカだわ、
なんで？ わかんない... なんでだろう... だって、あいつ、あんなせつない目で、
はじめてだって言った... エッ、童貞を奪っちゃったってこと？ どうしよう?...って、
な、なんで私が責任感じなきゃいけないのよ!? だって... 完全に私からだった...
私がキスしちゃったのよ、なぜか... くちびるが震えてたわ... はじめてだから？
そうね、あんなぎこちないSEX、なのに... 感じたのよ、私、バカみたい、なにやってるの!?
26にもなって、こんなジタバタして、バカみたい、どうしよう、あいつが誤解してたら、
だって初めてだから、なんていうの、おとなのつき合いなんて意味わからないでしょ？
だからって「あれは遊びよ」なんて言えないし、それに...私...遊びじゃなかった...
でも、無理よ！ このままこんなこと続けられないし、あいつは、ホームレスで、
あいつとは... 絶対無理...

髪の毛乾かして、服を着てバスルームから出ると、あいつが玄関に座ってた。

「なにしてるの？」

「もう行くよ」

「エ？」

「ねーちゃんには、すげえ世話んなっちゃまって、ありがとな」

あいつはそう言って立ち上がった。

「いいわよ、そんなこと」

「俺、一生忘れねえよ」

「忘れたっていいわよ、こんなこと」

「忘れらんねえよ」

あいつがそう言って情けな〜い顔で笑った。

「勝手にすればいいけど、私は忘れちゃうわ、きっと」

「うん」

「ゆうべのことだって、私にはSEXの回数が一回増えたってくらいのことなのよ」

「うん」

「なんていうの？ ちょっと酔ってて、それに、ちょっと浮かれてたのよ、

ニューヨークに行けるから、だから、それだけ、わかるでしょ？」

「うん」

「だから、忘れてほしいの、私としては」

「うん」

「これから私のこと見かけても、知らないふりしてよね」

「うん」

「いやなのよ、ホームレスと知り合いだって思われるの」

「うん」

「ミャー」

私の足元に小猫がまとわりついてきた。

「ちょっと、早くこのネコ連れて出て行ってよ」

「うん」

あいつが小猫を脇に抱えてドアを開けた。

「そんじゃ」

あいつが情けな〜い顔で笑って、ドアを閉めた。

なによ、呆気ないじゃない、そうよね、べつに、恋人同士でもないし、友だちでもないのよ、ゆうべのことだって、あいつにしてみたら、なんていうの？ 儲けたって、それくらいでしょ？ だから、あんなにアッサリ出ていったんでしょ？

そうよね、ホームレスなんか相手にする女なんていないんだから、そうよ、私だって、ゆうべはちょっと浮かれてて、それだけだったんだから。なんていうの？

犬も3日飼えば情が移るって言うじゃない？

そういうカンジだっただけよ。あー、サッパリした！

キッチンに戻ると、床の上に不器用にたたまれた毛布。

捨てよう、あいつが使った毛布なんか。毛布を持ってベッドルームへ。

着替えなきゃ。そうよ、着替えて会社に行って、帰ってたきら... もう... いない...

いいじゃない、あいつが来る前は、そうだったんだから。

前に戻っただけよ。そうよ、やっと、戻っただけよ。

鏡の前に座って、いつもどおりのメイク、デキる女って顔になるのよ。

ニューヨークに行けるのよ？ すごいわ、夢が叶うのよ？

なのに... なんで泣いてるの... 鏡の中の私... なんでこんなに悲しいの...

夢が叶うのに... 胸が苦しくて... 涙が止まらない... ちがうわ、これは、ただ、情が移っただけよ、犬も3日飼えば... そうよ...ただそれだけ... なのに...毛布に顔を埋めて...あいつの匂いを探してる... あいつは出ていったのよ...あんなにアッサリと... もうイヤ... こんなミジメな思いは... こんな辛い思いは... もうイヤ！

私は毛布を床に投げ捨てて、スーツに着替えた。

2週間後、私はニューヨークへと旅立った。

二ヵ月後

ひさしぶりの日本...なんて、カッコいい言い方ね。

結局ニューヨークに2ヵ月弱。 成果もしっかり上げてきた。

帰国の報告に行ったら、専務なんかニッコニコしちゃってたわ。

「これだけできるんだったら、北川くんを主任にしてもよかったなあ」って、気づくのが遅いのよ！

ニューヨークでは課長と二人きり...と、言っても、向こうの人たちとずっと一緒だったけどね。仕事も一段落した頃に、課長に飲みに誘われたわ。二人きりで飲みに行くのは初めてだった。

「さすがだね」

彼がI.W.ハーパーのロック片手に言ったわ。

「君は本当に魅力的な女性だよ」

「酔ってるんですか？」

私は鼻で笑ってグレープフルーツジュースに口をつけた。

「いや、本音だよ」

「やっぱり酔ってるじゃない」

そう言って笑うと、

「ほら、そうやってガードを張るだろ？」

「ガードも何も、私たちはただの上司と部下でしょ」

「前からじゃないか」

「え？」

「つき合ってるときからだよ、君はいつもガードを張ってた」

「そんなことないわ」

「隙がないんだ、いつも」

「え？」

「いつも冷静で、取り乱したり怒ったり、そんな君を見たことがないよ」

「あるじゃない？ あなたの... 処理するとき」

私はそう言って笑ってみせた。

「泣かなかったよ」

「泣けばよかったの？」

「いや、泣かれたら困ったよ」

「ほら！」

私は大声で笑った。

「もう一度やり直せないか？」

「え？」

「やり直したいんだ、君と、結婚を前提に付き合いたい」

「な... なに言ってるの？」

「虫のいい話だっていうのはわかってる、でも、君と別れて、やはり俺には君しかいないよ」

「だって、専務の娘と婚約するんでしょ？」

「専務は退職するんだ」

「え？」

「今回の企画が終わったら退職して、ご子息が跡継ぎとして会社に入るようになった」

「だから... なに？」

「専務の娘と結婚する必要はないってことだ」

「あ... そう」

つまり、専務の娘と結婚してもメリットはないってことね。

「美里、考えてくれないか？」

「プッ、クククッ アハハハ」

「何がおかしいんだ？」

「だ～って、美里なんて、私の名前呼んだことないじゃない！」

「呼んでもいいだろ？」

「会社でもクセで名前を呼んでしまったらマズイって言ったのはあなたよ？」

「そうだけど、もういいだろう」

「もういいわよ、もうやめましょう」

「え？」

「バッカみたいよ、こんなの！ あれでしょ？ 私が今回の交渉を成功させたから、だから、そばに置いておこうって、それだけでしょ？」

「なに言ってるんだよ」

「私ね、もう男に頼って生きるのはやめたの」

「君は自立してるじゃないか」

「いいえ、頼っていたわ、あなたと結婚して重役夫人になりたかっただけなのよ」

「え？」

「自立した女のつもりだったけど、男に頼ろうとしてただけだったのよ、だから、あなたの機嫌を取ろうとして、理解のある女のふりして、言いたいことも言わないで、バカみたい、私、もうそういうのやめたの、好きなように生きるわ、私の好きなように！」

立ち上がって、ポカンと私を見上げてる彼に背中を向けた。

ラウンジから出て、感じた。私は変わった... ううん、変わってない...

でも、このままで生きることにした... そうよ、一人で生きるわ、誰にも頼らずに！

だから、その前に... やらなきゃいけないことができたのよ。

帰国して一週間目の日曜日。

私は地下道の中を歩いていた。

相変わらずホームレスたちが通路の脇に寝そべってる。

一人一人の顔を見て、でも、いない。どこにもいない。

まったく肝心なときにいないんだから！

しょうがない、駅前の喫茶店でコーヒー飲んで帰ろう。

ふと、階段の脇の薄暗い小路を見ると、あ...れ...

汚ったない上着にドロドロに汚れたジャージ、垢と埃で汚れた顔に無精ヒゲ生やした男が、壁に寄りかかって寝てる。 あれは、絶対あいつだ...！

「ちょっと、あんた！」

あいつはビクツとして目を開けた。何が起きたのかわからないってカンジで、オドオドあたりを見ながら、汚ったない手で目をこすってる。

「ここよ！」

あいつはビクツと私を見上げて、そして、ポカンと口開けた。

「相変わらずホームレスなわけね？」

あいつはチラッと私を見て、気まずそうに下向いた。

「まあ、いいわ、あんた、まだ、あの三文判持ってる？」

「え？」

「ハンコよ！ 森下っていうハンコ！」

「う、うん」

「あっそ、それじゃ、これに名前書いて判を押してよ」

私は書類をあいつの前に突き出した。

「え？ こ、これ、なに？」

あいつが書類をボーッと見た。

「墮胎の申請書」

「エッ？」

「知ってるでしょ？ 前に名前書いて判押したやつ」

「う、うん、あの...」

「またできちゃったのよ、でも、産むつもりないから墮ろすの、

それで配偶者のサインと判が必要なのよ、早く書いて」

私は、ボールペンと書類をあいつの胸元にグイッと押しつけた。

あいつはチラッと私の顔を見て、コンクリートの床に書類を置いて、名前を書いた。

汚ったないジャージのポケットから三文判を出して、名前の下に押し、私に渡した。

私は黙って書類を受け取ると、カバンの中に入れた。

「ネコは？」

あいつのそばにあの小猫がいなかった。

「死んだんだ」

「エッ？」

「車に轢かれて... あいつ、足悪りいからよけらんなくてよ」

あいつが悲しそうな顔でそう言って...

「そう...だったの...」

あんなに可愛がってたのに...

「俺さ... ねーちゃんに... 一個だけウソついてたんだ」

「え？」

「あいつの名前... ミィミィなくからみいちゃんじゃなくて、ねーちゃんの名前のみーちゃんなんだ」

「エッ？」

「ねーちゃん、俺に名前呼ばしてくんねえからさあ、ねーちゃんの名前...呼びたくて...」

あいつはそう言って情けな〜い顔で笑った。

「な... なに...よ... 私の名前... ネコ...なんかに...」

「ごめんな」

あいつが淋しそうに笑った。

なによ...私の名前...呼びたいからって... なによ...なんで...そんなこと...言うのよ...
出ていったくせに... さっさと出ていったくせに...

「それじゃ、私もひとつだけ教えてやるわ、別にたいしたことじゃないけど」

あいつがポカンと見上げてる。

「私のお腹の中の子ども、あんたの子なの」

「エッ？」

「そうよ、あの夜の、あとは思い当たらないんだもの、100パーセントよ」

「お...俺の...」

「ほんとにバカみたい、油断してたわ、もうタイヘンだったのよ、ニューヨークの後半、
ツワリがきちゃって、帰りの飛行機の中はずーっと吐きっぱなし、死ぬかと思った」

「ね、ねーちゃん、あの」

「ああ、気にしないで、墮ろせば終わりだから、私もどんどん仕事が忙しくなってるし、
さっさと処理したいのよ、だから、アセッて、あんたのこと探してたの」

私は財布を出して千円札を出した。

「これ、お礼、千円なら盗んだと思われなくてしょ？」

そう言ってあいつの足元に投げて、背を向けた。

何がみーちゃんよ！

私はカツカツと地下道を歩いて...

さっさと出ていっちゃったじゃない！ 一回やれば気がすんだだけなんでしょ！

なのに、なによ！ 何がみーちゃんよ！

「ねーちゃん！」

あいつの声がして、振り向くと、あいつが顔を歪ませて、脚を引きずりながら必死に走ってきた

。

「ねーちゃん、待ってくれよ！」

あいつが私の肩をつかんだ。

「な、なによ？」

あいつの息が荒くて...

「くれよ」

「ハ？」

「俺にくれよ」

「なにを？」

「ねーちゃんの腹の子」

「ハアアア？」

「ねーちゃんいらねえなら、俺にくれよ」

あいつが必死の顔して...

「たのむよ、俺にその子くれよ」

「バッカじゃない!? 今、ポンとお腹から出してあげられるわけないでしょ！」

「そ、そうだけだよ」

私はあいつの手を振り払って、

「バカみたいなこと言わないでよ！」

行こうとすると、あいつがまた肩をグッとつかんだ。

「た、たのむよ、お、俺が産めりゃいんだけどよ、できねえからよ」

「あたりまえでしょ！」

「だから、ねーちゃん、生まれるまでガマンしてくんねえか？」

「ハ～？」

「生まれたら、俺、その子もらうからよ」

「あんた、アッタマおかしいんじゃないのっ!？」

「そ、そうかもしんねえけど」

「だいたい、あんたが子ども育てられるわけないでしょ？ ホームレスで、仕事もなくて、

住むとこだってなくて、どうやって育てるのよ？ 路上で？ 乞食して？ できると思ってるの!？」

「お、俺、その子が生まれるまでに、なんとか仕事探して、それで、住むとこ見つけて、まともになれるように、すっからよ、だから、ねーちゃん、おねがいだよ」

「何言ってるのよ！ 私のところを出てから、あんた、結局またホームレスしてるじゃない！」
あいつが暗い顔で私をチラッと見て...

「まともな生活なんて、あんたにできるわけないでしょ！」

あいつのくちびるが震えて...

「俺...浮浪者で、どっしようもねえヤツで、クズみたえなヤツだけど」

あいつの目から涙が...

「俺、ねーちゃんの子が欲しいよ」

あいつの目からボロボロ涙がこぼれて...

「俺... ねーちゃんと会って... ねーちゃん、俺に声かけてくれて...

誰も、俺になんか声かけてくれたことねえのに、ねーちゃんは...たのみがあるって...

俺になんか誰もなんも頼んだりしてくんねえのに、

ねーちゃんは...まともに話ししてくれて...まともに相手してくれて...

俺...すげえ嬉しくて...俺...ねーちゃんといると、すげえシアワセで、生まれてはじめてシアワセで...」

あいつが子どものようにしゃくりあげて...

「あんときも、あの夜も、ねーちゃんは俺のことなんかまともに相手にしてるわけじゃねえって

、

わかってたけど、でも、俺はすげえシアワセで、俺、あのまま死んでもいいって...そんなくらいシアワセで...だから、そんなときできた、ねーちゃんと俺の子ども、殺さないでくれよ！」

あいつは泣きながら、そのまま、通路の床にベタッと座り込んで...

「俺...欲しいよお...ねーちゃんの子...欲しいよお...」

あいつの肩が震えて...

「俺...まともになるからよお...だから...その子...殺さないでくれよお...」

私は座り込んであいつを冷たい目で見ながら...

「それじゃ...」

冷静な声で...

「私は... この子を産んで、そして、あんたにあげればいいわけ？」

あいつはチラッと上目使いで私を見上げた。

「そうなの？ とにかく産んで、あんたにあげればいいのね？」

「う、うん」

「あっそう、それじゃ、産んで、そしたら私の役目は終わるのね？」

「あ、あとは... 俺... 育てっからよ...」

「バー—ツカじゃない！ なにそれっ!？」

あいつが驚いた顔で私を見上げた。

「冗談じゃないわよっ！ 私はね、私は赤ん坊製造マシンじゃないわよっ！」

「え、あ、そ、そんな...」

「なによ？ あんた、赤ん坊だけ欲しいわけ？ 私はどうでもいいわけ？」

「エ？」

「さっきから、子どもが欲しい子どもが欲しいって、私は欲しくないわけっ？」

「エッ？」

「私のことはどーするのよっ？」

あいつはポカンと私の顔を見てるだけで...

「ちょっと！ なんとか言いなさいよ！」

「え... あ...」

「私のことは欲しくないのっ？」

あいつはポカンとした顔で、ヨタヨタ立ち上がって、驚いた顔のまま...私の顔をジッと見て...

「欲しい...」

あいつが私の肩をつかんで...

「欲しい... 俺... 欲しい... ねーちゃん欲しい、ねーちゃん欲しい！」

「ねーちゃんて誰よっ？」

「え？」

「名前呼びなさいよ！」

「あ... な、なんて」

「知ってるでしょ！ 美里よ」

あいつは照れくさそうに微笑んで、

「み・・・美里・・・ 美里！」

そう言って私を抱きしめた。

「あんた、死ぬほど臭い！」

私の腕は...あいつの背中に...

「うん」

「臭くて吐きそうよ！」

「うん」

「このスーツ、ニューヨークで買ってきたのに、汚れちゃうじゃない！」

「うん」

「離してよ」

「イヤだ」

あいつがもっと強く私の身体を...

「離してってば」

私の腕も...あいつの身体を...

「ぜってえ離さねえ」

「ぜってえって、いつまでよ？」

「ずっと」

「ずっとって、一生ってこと？」

「うん」

「それってプロポーズのつもり？」

あいつは返事の代わりに、もっとギュッと私を抱きしめた。

「てことは私はあんたと結婚するの？」

仕事もなくて、お金もなくて、住むところもないヤツと？

駅の名前が名字で、役所の人がつけた名前のヤツと？

ロクに読み書きできなくて、逮捕されて少年院に入ったヤツと？」

あいつの腕が少し緩んで、不安そうな目で私の顔を覗き込んだ。

「つまりこういうことね、私は死ぬほど臭くて汚ったないホームレスと結婚するのね？」

私はあいつの腕からちょっとだけ身体を離して腕組みして言った。

あいつは不安そうな怯えてるような・・・そして・・・

「なによそれ？ 最低じゃない！」

あの夜のときの目で私を見てる・・・

「最低！」

私はあいつの腕の中にまた飛び込んで・・・

「結婚するわよ！」

あいつの顔を見上げると、震えるくちびるかんで、涙ボロボロこぼして・・・

私をギュウッと抱きしめた。

それから

「主任、判をお願いします」

女子社員が書類を机の上に置いた。

そう、私、主任になっちゃったの。オーッホッホ！ まあ、遅すぎたくらいよね！

「ちょっと、あんた、ここ、表が一行ずれてるわよ」

私は爪でトントンと書類を叩いた。

「え？ あっ、す、すみません」

「幼稚園のお絵かきじゃないんだから線引けばいいってもんじゃないのよ！

たかが表作りだと思ってやってんじゃないわよ、あんたのこの表一個で、何億ってお金が左右されちゃうんだからね」

「え、そ、そんなあ」

「そんなじゃないわよ！ どーでもいいようなことなら作る必要ないんだから！

あんたが作った表で会社が動いてるのよ？ わかる？」

「わ、私、そんなすごいことやってるんですかあっ？」

「あたりまえでしょ！ 何やってたと思ってたのよ！

あんたは私の部下なんだから、いかげんなことしたら承知しないわよ！」

「はい！」

よっころしょっと。

あ〜、イヤになっちゃう、このお腹！ 早く出てくれないかしら、重いのよっ。

だいたい妊婦服なんてださくて早く脱ぎたいわよ！

予定日まであと一週間。あーっイライラするっ！

化粧室に行くと「清掃中」の札が下がってた。いいわ、入っちゃお。

個室の方でガタガタ音がしてる。

「ねえ、まだあ？」

「あ、もうすぐっスから」

顔を出したあいつ。

「あ、美里かあ」

ニッコリ笑って、

「なによ、声でわかりなさいよ」

「ハハハ」

あいつがバケツ持って、ヒョコンタヒョコタンそばに寄ってきた。

「おーい、元気かあ？」

かがんで私のお腹を触ろうとするから、

「ちょっと！ トイレ掃除したゴム手袋で触らないでよ！」

「あ、ご、ごめん」

あいつが情けな〜い顔で笑って、片方のゴム手袋を外した。

「触ってもいい？」

「いいわよ」

あいつが嬉しそうに微笑んで、私のお腹を撫でた。

「おーい、とうちゃんだぞお」

「その、とうちゃんってやめてよ」

「や、やっぱダメかなあ」

「そうよ、パパとママか、そうねえ、マミーとダディでもいいわね」

「ダッ...」

あいつが思わず吹き出して、手袋はめてるほうの手で口押さえた。

「ギャー——ッ！ ちょっと！ 汚ったないでしょ！」

「あ、ご、ごめん」

「あ——も——っ、絶対キスしない！」

「んなこと言うなよお」

あいつが情けな〜い顔で笑った。

「イヤよ！ 便器触ったゴム手袋で口押さえて、あーイヤ！」

あいつがギョッと私を抱き寄せて、チュッ。

「へへへ、しちまったあ」

「最低！」

「うん」

そう言ってまた、チュッ。

「もう、見られたらどうするのよお」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ、もう」

今度は私から、チュッ。

ギーッとドアが開く音がっ、私は、あわてて個室にボタン！

「清掃中ですかあ？」

うちの部の女の子の声。

「やだ、清掃中？」

この子もそう。

「もういいっスよ」

脚を引きずって、あいつが出ていく音がした。

「ねえねえ、今の人」

「え？ あの掃除の人？」

「うん、ちょっとかっこよくない？」

あら、そう？ あんた、見る目あるじゃない！

「身長高いし、顔もよかったわよ」

そりゃそうよ！

「でも、掃除夫でしょお？」

「まあね」

「しかも、脚悪いみたいだし、あの若さで掃除夫じゃねえ」

「そうねえ、カレシにしたいわよねえ」

「かっこ悪いわよお、掃除夫がカレシなんてさあ」

「言えてるう」

私は個室のドアをバタンと開けて、

「失礼」

彼女たちの間をすり抜けて、手を洗った。

「あ、主任、昨日主任に教えていただいた企画会議用の書類の揃え方、

今日そのとおりにやったら、部長に誉められたんですう」

「あ、そう」

「主任が指導してくださったおかげですう」

「あんたのために教えたわけじゃないわよ」

「ハ？」

「お先に」

私はドアを開けて、ゆっくり振り向いた。

「あのね、さっきの掃除夫、私のダンナなの」

「ハ？」

「かっこいいでしょ？」

「は、は、はい」

仰天こいてる彼女たちに背を向けて、バタンとドアを閉めた。

そう、あいつは今、うちの会社で契約してる清掃会社に勤めてる。

あいつも必死に職探ししたんだけど、本当はないのよね、だって、読み書きできない、
学歴もない、脚が悪いの三拍子揃ってるんだもの。現実ってそんなものよ。

そしたら、ちょうど、うちの会社に入ってる清掃会社に空きがあるっていうんで、
私が話をつけたの。清掃会社の社長、ビックリしてたけどね、だって、得意先の主任の

ダンナだものね。でも、今では「すごくよくやってる」って喜んでくれてるのよ。

「でも、イヤじゃない？」

「なにが？」

あいつはポカンとした顔して私を見た。

「奥さんの会社に掃除夫で入るって、男としてイヤじゃない？」

「なんでだよ？ 俺、すげえ嬉しいよ」

「ほんと？」

「うん、だって美里のそばにいれんだからよ、こんないい仕事ねえよ」

「もう、カズオったらあ」

「それに、会社にいるときの美里って、すげえかっこいいんだよなあ」

「ほんと？」

「うん、こんなかっこいい人が俺の奥さんなのかあって、俺、信じらんねえくらいだよ」

「もうっカズオったら～ん」

私はカズオの胸に顔をつけた。

「んで、家ん中だと、すげえ可愛いもんなあ」

「イヤ～ン、カズオったら～ん、ゴロニヤ～ン」

もうもうカズオの胸に頬をスリスリ～...って、こんな姿、会社の子には絶対見せられないわ....。

さて、子ども。そう、子どもが生まれたらどうするか...よ。

生んだらすぐには仕事できないじゃない？ それに、もし私が子育てに専念するとしたら、

どうやって生活していくの？ だって、カズオと私の収入格差ってほぼ10倍よ？

つまり、カズオの給料だけじゃ、今までの10分の1で暮らしていかなきゃいけないってことよね

。

部屋代だって払えないじゃない？

「やっぱり保育園に入れるしかないわね」

「え？ そ、それって、あの、預けちゃうってことか？」

「そうよ、しかたないじゃない、私も働かなきゃ暮らしていけないわよ」

カズオは暗い顔して、黙って下向いてた。

「なによ？ どうしたの？」

「お、俺さ、俺、もっといっぱい働くからよ、夜も、土方なら夜も仕事あるしよ、

美里みてえには稼げねえけど、美里と子ども、ぜってえ食わしてくからよ、

だから、美里、金の心配すんなよ」

「え...？」

「俺... 一人んときは、なんか、どうでもよくなってて、あんな暮らししてたけど、

美里と、俺たちの子どものためなら、俺、なんだってやれっからよ」

「なんでも...やれる...のね？」

「うん」

「なんでも？」

「うん」

「そう、それじゃ、カズオ、あんた、主夫やってよ」

「あ？」

「主夫よ、専業主夫！」

カズオがポッカーンと口開けて私を見てた。

「だって、あんたの方が私よりは料理が上手で、掃除も上手、買い物だって、私みたいにポンポン買っちゃわないでしょ？ 見切り品とかそういうの見つてくるの天才じゃない！」

「ハ... ハア...」

「それにね、私、子ども苦手なのよ、知ってるでしょ？ いっつも言ってるんだから」

「う、うん」

「それに、あんたが子ども欲しいって言ったのよ？ 憶えてる？」

「うん」

「私はあんたが欲しいって言うから産むの。だから、産んだ後は、あんたにあげる」

「ハ？」

「つまり製造担当と、飼育担当？」

「あ？」

「あ？じゃないわよ、つまり、お互い得意分野を担当しましょうって、そういうことよ」

「ハア」

「ハアって、まだわからないの？ だから、私が稼いで、あんたが家事と子育てするの！」

「ああ！ そうかあ」

「やっとわかったの？ まったく！ どう？ それでいい？」

「俺は、ぜんぜんいいつつうか、美里がそれがいいつつうんなら、いいけど、美里、ほんとにいいのか？」

「いいにきまってるじゃない！」

「でも、やっぱ、俺、いちおう、美里のダンナで...」

「いちおうじゃないわよ！ ちゃんとダンナよ！ 婚姻届け出したでしょ？」

「うん」

あいつが照れくさそうに微笑んだ。

「俺、美里のダンナで、なのに金も稼がねえでいいのかなあって」

「あんたね、私はホームレスと結婚した女よ！ ダンナに稼いでほしかったら、あんたとなんか絶対結婚しないわよ！」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ！ ホームレスが主夫になるんだから立派な出世じゃないよ！」

「ハハハ、そうだなあ」

「ただ... あんたが本当にイヤじゃなければ...だけど」

そう言って、あいつの顔を見ると、あいつがニッコリ笑った。

「俺は美里のためならなんでもするよ、してえよ、美里が俺にしてほしいことなら、俺、なんでもしてえんだ」

「もうっカズオったら～ん」

カズオに抱きつくと、カズオが私を抱きしめて、優しく頭を撫でる。

そうよ、私、お金のためや、重役夫人の座が欲しくてあんたと結婚したんじゃない。

あんたのそばにいたくて、そばにいてほしくて、一緒にいるとシアワセだから結婚したのよ。

「課長、決裁の判お願いします」

今度新しく主任になった女性社員が書類を机の上に置いた。

「あんたも主任らしくなってきたわね」

「わあ、そうですかあ？ 嬉しいですう」

「その、すうって、語尾伸ばすのやめなさいよ！ みっともない！」

「す、すみません」

そう、この子、いつも化粧室であーたらこーたら言っていた女子社員。

私の下で働くうちに、「目覚めたんですう」って総合職を受けなおして、今では主任。

「課長のおかげですう、課長が私のためになって、いろいろ教えてくださったからあ」

「あんたのために教えてたわけじゃないわよ」

「ハ？」

そう、私は課長、29歳で女性初の課長！ 異例の大抜擢！って言われたけど、実力よ。

早いわあ、もう3年？ 子ども？ とっくに生まれたわよ。

もうあの陣痛、二度とゴメンわ！ 死ぬかと思ったもの！

カズオは陣痛室も分娩室も、ずっとそばにいた。

立会い出産ってやつ？ カズオが希望したんだけど、私もそうしてほしかったのよ。

だって、私一人苦しむなんて割に合わないわよ！ カズオは一瞬の快感だけで、

私は10ヵ月重たいお腹抱えて、その上陣痛なんて、冗談じゃないわ！

しっかりと、私の苦しみを見せとかなきゃ！

でも、いてくれてよかった。陣痛のときはずっと腰をさすってくれて、少し楽になったし、

産むときには、ずっと手を握っててくれたから、心強かった。

子どもが生まれたときのカズオったら、おいおい泣いちゃって、

「なに泣いてるのよ！ 痛い思いしたのは私なのよ！」

分娩台の上で怒鳴っちゃったわ。

「だって、俺、感動しちまってよ」

カズオは涙でグシャグシャの顔で言った。

「あ～あ～あ、パパになった感動ってやつね」

「つうか、美里が必死になって、苦しいのガマンして産んでんの見たら、

なんか、美里がいじらしくて、可愛くて、なんかすげえ感動したんだ」

「もう、カズオったら～、バカ～、ウフッ」

看護婦たちは「勝手にやってろ」って顔で見てたけどね。

さてと、名前よ。あ、生まれたのは女の子なの。

カズオは「美里そっくりで可愛い」って言うけど、私は、生まれたてで「フンギャー」って泣いてた顔は、カズオがあくびしたときの顔にソックリだと思ったけどね。

カズオは、仕事が終わると毎日病院に来たわ。

「そろそろ名前決めないとね、名前つけないうちは退院できないんですって」

「あのさあ、俺、考えたんだけどよ」

「あ、そう？ なに？」

「えっとさ」

カズオが作業ズボンのポケットからクシャクシャの紙を出した。

「愛って、どうかな？」

そう言ってその紙を見せた。汚ったない字で「愛」って書いてある。

「俺、練習したんだ、オヤジが子どもの名前書けねえとやべえもんなあ」

そう言って笑うけど、

「アイ———っ？ なにそれ———っ！ やめてよ———っ！

愛し合ってできた子どもだから愛ですって、そんなベタな発想でしょ？」

「う、うん」

「ベタすぎて、恥ずかしくて、人前で子どもの名前呼べないわよ！」

「そ、そっか？ そ、そんじゃ、何がいい？」

「そうねえ... 海外でも通用するグローバルな名前がいいわね」

「ぐ、ぐろ？」

「ちょっと貸して」

私は、愛のとなりに、「沙羅」「樹理亜」「麗奈」...あとは...

「こ、これ、なんて書いてんだ？」

「サラ、ジュリア、レイナよ、どれがいいと思う？」

「え... お、俺、書けっかなあ」

あいつが泣きそうな顔して、メモを見てる。

「あ———っも———っ、いいわよ！ 愛でいいわ、愛で！」

ということで、愛なの。

いいんだけどね、名前なんて、なんでも。

カズオなんて駅の名字と役所の人が適当につけた名前よ？

それでもなんとかなってるんだから！

出産後一ヶ月は出産休暇を取ったけど、すぐに復帰。

よく元のポジションに戻れたと思うでしょ？

それがね、新社長、つまり、提携していた米国の会社の社長なんだけど、そう、まあ、合併されちゃったのね。あのときは上の連中は大騒ぎだったけど、私には好都合な状況になったの。

その社長っていうのが女！ しかも出産経験あり！ で、女性社員の出産休暇、その後のポジションの保障がしっかり確定されたのよ！ オーッホッホッ！

カズオは約束どおり主夫になったわ。

愛の世話して、散歩させながら買い物して、洗濯して掃除して、ごはん作って...って、私だったら、ゼーったいイヤ！ってことを、ニッコニコしてやってるわ。

「ただいまあ」

奥からチョコチョコと愛が走ってくる。

「かあちゃん、おかいりー」

そうなのよ... かあちゃんって言うの、私のこと....。

だって、ほら、愛ってカズオとずっと一緒にいるでしょ？

カズオが、「とうちゃんへ行こう」とか、

「かあちゃんの好きなイチゴ買ってこうなあ」って言うもんだから、

愛は、すっかり「とうちゃん、かあちゃん」になっちゃったのよ....。

カズオもね、それでも何度か「マミー」とか「ダディ」って言おうとはしたらしいの。でも、どーしても恥ずかしくて言えなかったっていうのよ、まったく！

「ごめんなあ」

カズオが情けな〜い顔で笑った。

「いいわよ、今さら、もう遅いわよ！」

それに... 愛が「かあちゃん」って言うと、すごく可愛いのよおおお。

可愛い声で「かあちゃん、チュキ〜」な〜んて、言われると、もうもう、

「愛ちゃん、可愛いでちゅでちゅ〜、チュッチュツ食べちゃいまちゅよ〜」...って、こんな姿、会社の子には絶対見せられないわ....。

「早いわよねえ、愛も4月から幼稚園よ？」

愛の寝顔を見ながらそう言うと、カズオも横から覗き込んだ。

「なんか淋しいなあ」

「なんで？」

「愛が生まれてから、ずっと一緒にいたからよ、なんかなあ」

そう言って情けな〜い顔で笑った。

「なに言ってるのよ、幼稚園ぐらいでそんなんじゃ、結婚するときなんてどうなるの？」

「んなこと、考えたくねえよ、ぜってえイヤだ」

「バッカみたい！」

私は呆れた顔して笑ってみせた。

「美里、俺さあ、愛が幼稚園行くようになったら、働こうかと思うんだ」

「え？」

「働くつつつてもパートだけどよ、そこのスーパーあんだろ？」

あそこで荷物運びと清掃の仕事があるつつうからよ」

「もう面接してきたの？」

「うん、チラッと話聞いて、午前中4時間くらいでもいいつつんだ、

そんなら、愛が幼稚園から帰ってくるのに間に合うだろ？」

「そう...」

「ダ、ダメかなあ？」

「ダメじゃないけど... またすぐやめなきゃいけなくなると思うの」

「お、俺、まじめに働くよ？ 脚の話もちゃんとしてるしよ、字も前よか読めるように

なってきたるしよ、それに、あんま頭使う仕事じゃねえから、俺にも...」

「そういう問題じゃないのよ」

「え？」

「できちゃったのよ」

「あ？」

「子ども」

「エッ？」

「愛の弟か妹」

カズオが大きく目を見開いて、そして・・・

「み... 美里！ 美里——っ！ ヤッター——！」

ギュッと私を抱きしめた。

「だから、10ヵ月後には、また主夫してもらわないと」

「やるよ！ 俺、やるよ！」

「それじゃ、また、私が製造担当、あんたが飼育担当ね！」

「うん」

カズオがニッコニコして言った。

「カズオ、あんたって、私の理想の男だわ」

「え？」

「な～んにも持ってなくて、お金も地位も名誉も、名前さえ駅の名前の名字で、役所の人が適当につけた名前で、それくらい、なんにもなくて」

カズオが情けな～い顔で笑った。

「男のプライドとか沽券とか見栄とか、そんなバカらしいもの、なんにも持ってなくて、私のことだけ、いーっぱい愛してくれる」

「うん」

カズオが照れくさそうに微笑んだ。

「俺、美里がいればなんもいらねえもん」

「私もよ、カズオ... 愛してる」

カズオが私を抱きしめる。 そうよ... あんたは何も持ってない、だけど、私が一番欲しいものを持ってる... 私への愛を...

「課長、判をお願いします」

「ちゃんとチェックしたのね？」

「はい」

「そう」

私は机の中から三文判を出した。

そう... 結婚するとき、カズオが言ったのよ。

「俺の名字で... いいんか？」

「え？」

「俺の... ただの駅の名前取ってつけただけで...」

カズオがちょっと悲しそうな顔で私を見た。

「美里がイヤなら、俺、美里の名字でいいよ」

「バッカじゃない？」

「え？」

「あんたと、私と、子どもが森下になったら、もうこの名字は駅の名前じゃないわよ、私たちの名前になるんじゃない！」

カズオがポカンと私を見た。

「これからは森下は駅の名前じゃないのよ、私たち家族の名前！」

カズオの目が真っ赤に潤んで...

「だから、森下よ！ わかった？」

「うん」

「私は今日から森下美里よ！ わかった？」

「うん」

カズオの目から涙が...

「このお腹の子も森下！」

「うん」

「私たちが森下よ！」

「うん」

カズオは、そのまま私に抱きついて泣いた。いっぱい... 泣いてた。

私は、書類の上に「森下」という判を押した。

FIN.